

あなたへ 眞実からの伝言
— 感動と生きる喜びを —

平和の礎

いしずえ

交野在住者戦争体験集

第五集



「平和の礎」第五集発刊にあたって：

この小冊子は、

公募に応じられた交野市在住の戦争及び終戦直後体験者の寄稿と聞き取り等を収録したものです。

前四集と共に、平和日本の礎とられた御霊（みたま）に捧げ、あなたを始め現在・未来を生きるかたがたにお伝えします。

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

（会長 可児義明）

目次

発刊にあたって 1

◁寄稿・聞き取り(五十音順 敬称略)

大西節子(天野が原町) 戦争と一条通り 3

奥角長生(森北) 戦時中の追想 13

喜多嶋豊次(星田山手) 満蒙開拓義勇隊開拓団の記録 15

嶋澤喜八郎(私市) 玉音の日も鳴っていた油蟬 37

谷村千枝(郡津) 命 38

松本静子(郡津) 孫たちへの証言―引き揚げ 42

門田利康(藤が尾) 戦前、戦中、戦後を生き 44

▽交野と満洲開拓団の縁(えにし) 47

▽交野の平和祈念モニュメント(いきいきランド) 53

▽交野市「平和と人権を守る都市宣言」(日本文および英文) 54

▽あとがき 56

題字Ⅱ 渋谷 正 挿し絵Ⅱ 中 悠妃

表紙 「コスモス」は、秩序と調和ある宇宙を意味することば。

花のコスモスは秋の桜とも呼ばれます。



「平和の輪のお菓子づくり」の様子

平成28年5月11日ゆうゆうセンターにて

戦争と一条通り

大西 節子(天野が原町)

★戦争と一条通り

暖冬で一旬早く開いた庭の紅梅も今は大方散り果て、少しばかりの花が名残惜しげである。その枝の向こうには青空が広がっている。

田辺聖子原作NHK朝の連続ドラマ、『芋たこなんきん』を見ていた私は、ぼんやりと窓の外を眺めながら、遠い昔を思い出していた。

このドラマの主人公は、私と同じ年齢である。彼女が幼い日の大阪市内のあの町並みがなつかしい。そして女学生時代、学徒動員で働く場面など、どれもが遠い日の自分と重なる。

昭和十九年、女学校の五年生だった私は、動員学徒として軍需工場で働いていた。

当時私が住んでいた家は、勝山通り九丁目。家の前には広い道路が東西に走っていた。その道を西へ六丁歩くと、勝山通り三丁目の市電、いわゆるチンチン電車の停留所に着く。そこから、南北に走る市電の、アベノ橋とは反対方向の電

車に乗る。細工谷を過ぎ下味原で下車。そこから今度は東へ走る今里行きに乗って、三つ目の停留所、大成通り一丁目下車する。これが私の毎朝工場へ通う道順である。

あの頃の大阪市内は、石畳の上の軌道を市電が縦横に走っていた。

停留所から北へ少し、下町のごちゃごちゃと小さい家が立ち並ぶ細い路地を通り抜けると、工場である。

自転車を製造していた小さい町工場が軍需工場になっていた。そこで私たち女学生一クラスと、旧制生野中学の生徒一クラスが、飛行機から発射される機銃弾「三〇〇一」を作っていた。私たちの作業はその機銃弾の検査である。

はじめ私は一人で電車通勤していたのだが、やがて、一条通りから通う級友が、何人かいることが分かった。下車した停留所前からまっすぐ南へ勝山通りまで通っている道、それが一条通りである。

そこで私はコースを変更して一条通りに行くことにした。家から一番遠く、歩いて一時間を要する距離だったが、それが苦にならなかつたのは、級友五人と合流して、楽しい道中となったからである。

当時は走り抜ける自転車も通らず、もちろん自動車などは見かけることもなかつた。

工場では国防色の木綿の作業服を着るが、行き帰りは制服を着用した。下はモンペである。その胸には、万一に備えて、

氏名、現住所、本籍地、血液型を墨字で書いた布を縫い付けている。

さらに防空頭巾（綿入れのもの）と救急袋（包帯、三角巾など）を肩から斜めに交差させて身に付け、今思えば物々しいでたちであった。

ところが夏も過ぎた頃から、敵機が毎晩一機だけ来襲し始めた。爆弾を落とす日も落とさない日もあったが、すべては軍の機密、何も知らされない。

空襲警報が発令されると、家族全員が起きて家の前の歩道に作った防空壕へ待避しなければならない。神経戦をねらったものである。

だからモンペに上着を着て、何時でも逃げられる格好で寝ていた。私は「死んでもいい、寝巻きを着て朝までぐっすり寝たい」と親を困らせたこともあった。

「そしたら、あんただけ寝てなさい」と言われ、一度だけ親にそむいた夜、近所に爆弾が落とされ、「ドカーン！」と凄い音と家が揺れたので震え上がった。もう二度と横着はすまいと思った。敵機来襲の半鐘を、一人布団の中で聞いた恐怖は忘れることはない。

そのうち昼間もアメリカの爆撃機が、毎日一機ずつやってくるようになった。工場では作業を止め疎開道路に作られた防空壕に待避するのが日課になっていた。疎開道路とは多く

の家を立ち退かせて作った広い道路である。

サイパン島が玉砕してからは、空襲も次第に激しくなってきた。生と死が紙一重の毎日だったはずだが、それほどの緊張感もなく、帰りは一条通りを連れ立って帰る仲間との語りには楽しかった。

皆、楽天的で明るいのは校風だったのだろうか。それとも暖房も満足にない寒い工場で、冷たい弾丸を一日中、握りしめるつらい作業から解放された安らぎのひとときだったのか。

そのうち戦況が次第に激しくなり、一条通りの若くもない、四十歳をこえた店の主までが、兵隊に取られて行った。商品の仕入れも難しくなったのだろうか、多くの家は店を閉めた。爆風でガラスの破片が飛び散らないために、白い紙が張られたガラス戸は閉ざされ、通りは侘しい風景と変わっていった。

昭和二十年、私は女学校の卒業式の翌日、一家で九州へ疎開、大阪を離れた。

まだ戦争がない時代、一条通りは色々な店が軒を連ね、庶民的な商店街だった。毎年夏が来ると扇子を買って貰った扇子屋さん。フェルトに花飾りのついた帽子をねだって買って貰った帽子屋さん。お菓子屋さん。木村のパン屋さん。お医

者さんの玄関先には往診用の人力車が置かれていた。などなど思い出は際限なくよみがえる。

★お隣のお兄ちゃん

お隣に五歳年上の兄ちゃんがいきました。名前は肇ちゃんと言いました。眼鏡をかけた背の高い旧制中学生です。その下にもう一人男の子がいて、まだその下に三人の妹がいました。私の家では、そのお隣と一番仲良くしていたようです。わりあい近くにあった天王寺さんにもよく一緒にお参りしました。

帰りにはすぐ近くにある康申さんで、「おこんにやく」を食べたものです。

その頃は床机の上に赤い毛氈を敷いてあって、その上で食べるおこんにやくの美味しかったことが思い出されます。

そんなときは、よそ行きの良い服を、お隣もわが家も着せてもらって行きました。それも私には、嬉しいことでした。うちは百合屋洋装店で、お隣は星野洋装店でお誂えの服でした。

仲良くしていても、案外、見栄もあったのかもしれませんが。女の子同士ではよく遊んだけれど、隣の肇ちゃんとは挨拶するでもなく、顔を合わせると、ちよつと笑いかけるのが、私の挨拶だったようです。

彼は受験勉強に忙しいようでした。三月が来ました。肇ちゃんは文系へ行くと、兵隊に取られるということで、その頃の親心だったのでしよう、彼は医専を受けたのです。

北は岩手から南は鹿児島まで受けましたが、残念な結果に終わってしまいました。

私も自分自身、女学校の受験期だったのですが、肇ちゃんが可哀想でなりませんでした。

そんなとき、肇ちゃんから葉書がきました。旅先からです。「節ちゃんがんばれ」

と激励の便りでした。

そののがきを隣のおばちゃんに見せました。ニコニコしながら、見ていたおばちゃんは

「肇は節ちゃんが好きなのね。自分もそれどころじゃないのにね」

と笑っていました。

その肇ちゃんは、結局どこの医専にもいけず、中央大学の法学部にはいりました。

それからどれくらい経ったでしょう。か。肇ちゃんについて赤紙（召集令状）が来たのです。大学生が学生服に赤袴をしてどんどん戦地へ出ていった時代でした。肇ちゃんも大勢の人に見送られ、家の前で堂々と挨拶をして出て行きました。何の感傷も見せませんでした。

すぐ戦地に行ったのでしようか。何の便りもありません。戦争もだんだんと厳しくなり、わが家も長崎へ、お隣は島根県へそれぞれ遠戚をたよって疎開しました。

私が大坂へ遊びに戻って来たのは、戦後世の中も大分落ち着き、汽車に乗るのも少しは楽になってからでした。

戦後は郷里で静かに暮らそうとしていた父と違い、何事にも積極的だった隣のおじさんは、やる気満々で大坂へ出て家を建て、いろいろな事業に手を染めていたようです。

私はそんなお隣を訪ねて肇ちゃんの死を、はじめて知りました。ただ呆然と聞いていました。肇ちゃんは当時、シンガポールにいたそうです。まだ日本軍が優勢な時代だったので、その日は皆で薪を割っていたのですが、割れた薪が飛んできて、眼鏡を壊してしまい、目を少し怪我をして病院へ行ったそうです。

のんびりした病院を想像しがちですが、たまたま病院に爆弾が落ちて、そこで亡くなったということです。

隊ではただ一人の戦死者だったそうです。私は仏壇の前で手を合わせました。涙がとまりませんでした。

★「テル」と「チロ」

もう七十数年も前になるが、私が小学生の頃、家に一匹の

犬が迷いこんできた。全体が、うすい茶色の少し長いめの毛で覆われた、可愛い目をした子犬であった。学校から帰ったとき、その犬は、私や兄、姉を待っていたかのように嬉しそうに尻尾を振った。私達は珍しくて、その犬を相手に大いに楽しんだ。

日が暮れてもその犬は帰ろうとはしない。ちゃんと首輪もしているし、父や母は、「きつと捜してはるよ」と心配して、翌日から家の前の街路樹に紐をつけて繋いでいた。犬は終日、人の通るのを見ているのが好きらしく、飽きもせず周りの風景をじつと眺めている。

何日か経ったある日のこと、

「失礼ですが、もしかして、その犬は」ということで飼い主は見つかった。

その人はきちんと背広を着た、このあたりでは、ちよつと見かけない人だったという。犬は飼い主に連れられて帰っていったと聞いて、学校から帰った私たちはがっかりした。短い間だったが、可愛かった犬を思い出して泣きそうな思いだった。

ちよつとでも犬の消息を知りたい。そんな思いでいた矢先、二、三日して、犬の飼い主が御夫婦でお礼の挨拶に見えた。女の人は『婦人倶楽部』の表紙に出ているような綺麗な人だと思った。話す言葉は東京弁で、家はあやめ池にあるのだけれど、仕事の都合でこの近所に来ているとのことだった。

犬の名前は「テル」ということがわかった。家は、私の家とは割合近かったが、私の家に来るには広い道路を渡らねばならなかった。

ところが、その後連れて帰られたテルが毎日私の家に来るようになった。テルは庭で放し飼いにしているようだ。

「どこから逃げて行くのか、門もちゃんとしまっているし、今までこんなことはなかったのですのに」と飼い主を嘆かせる。

「よっぽどお宅がいいのでしょね」

どんな隙間から逃げ出すのか、飼い主の気持ちも知らないで、テルは大きい道路を横切って、毎日やってきた。

とうとうテルは「お宅に貰ってもらいましょ」ということになり、我が家の犬になった。私たちは大喜びだ。

寒い夜などは家にあげてやる。居間の隅にテルの座布団をおいているが、そこに座ったテルは恐縮した様子で、手で顔を撫でるしぐさをする。

「そんなに気を遣わんでもいいのよ」というくらい遠慮して、じっと座っていた。大体が大人しい賢い犬だった。

もと飼い主のおばさんとの交流は続いた。お出かけのときなどは、何時も家に寄って、

「おみや買ってくるわね」と言って、帰りにはお土産を貰った。

おばさんの家へ遊びに行くと、晩御飯を時々私や姉妹も御

馳走になった。すきやきは今も覚えている。

そのうちおばさんが引越していった。テルはその後何年生きていたのだろうか。病気になるってあの世へ行ってしまった。

母は花色木綿の布に包んで、父が空き地に埋めてやった。私はテルがああ真っ暗闇の土の下で、ひとり眠っているのかと思うと、可哀想で毎晩寢床に入って泣いた。

テルがいなくなってから間もなくして、今度は妹がお友達のところから子犬を貰ってきた。まだほんの子供で、手の平にのるように小さく可愛かった。白に茶色のぶちのある犬である。名前は「チロ」とつけた。

チロはテルとは大違い、やんちゃな子だった。テルと同じように寒い夜は家にあげてやると、喜んで家中を駆け回った。チロが来てから五年ほど月日は経っただろうか。その頃から次第に戦争も激しさを増していた。そのうち、お上の命令で飼い犬は供出しなければならなくなった。人間も食べられない時代に、犬どころではないというのだろうか。

「なんと残酷な話やねえ」「殺されるんやろか」父も母もそれには返事をしなかった。家の中では、そんな話で持ちきっていたが、チロはそんなことは知る筈もなく、相変わらず元気に振る舞っている。

いよいよチロを連れて行かれる日がやってきた。一人の男

の人が家に入ってきて、チロを連れて行こうとした。引っ張ろうとしても、チロは踏ん張って必死に抵抗する。しかし最後には庭をずるずる引きずられて連れて行かれた。

私たちはただ呆然と立ち尽くすのみであった。母がすぐ玄関の戸を閉めた。見るに憊びなかったのだろう。

人の話では、外へ出ると、すぐに針金で首を絞められ殺されるのだという。自転車のリヤカーの周りの板で囲った中に、犬の死体を積み重ねて運ぶのだと聞いた。

そのとき家には母と私と妹しかいなかった。母は泣かなかった。妹は階段の下で泣いていた。これも戦争のため、お上の言うことには何一つ逆らうことは出来ない時代だった。ただじつと悲しみに耐えるしかなかったのだ。サヨナラも言えなかった。

そのことがあって以来、我が家では絶対に犬を飼うことはなかった。

★兄の復員

裏の県道には時々トラックの荷台に、四、五人ずつ復員兵を乗せて走っていく。戦争が終わり、わが村でも戦いに行つた若者が、ボツボツと帰りはじめた。

私の家から急坂をのぼると県道に出る。その時々、の車に、もしや、と思うのだった。

私の家では本籍地が長崎県なので、長男に赤紙(召集令状)がくると、本籍地の大村へ入隊しなければならぬことになっていった。

父はそのためにも長崎県へ疎開をしたのだった。もし面会というものがあっても、今住んでいる大阪からはとても行つてやれない父の親心でもある。

ところが一家が疎開しても兄だけは大阪に残っていたが、まもなくその兄のところに召集令状が来た。兄はやはり、長崎県の大村連隊へ行くことになった。

村の若い人三人と一緒に、小さな神社で壮行会をしてもらい出征していった。その後、兄はしばらく長崎市にいたが、宮崎県の都城市に配属となった。そして終戦となった。

「兄ちゃんはいつ帰ってくるのかしら」

私は毎日、毎日、待ちわびる日がつづいた。

復員列車で、屋根の上に乗っていて、トンネルでぶつかって死んだという話や、満員の汽車から溢れそうになっていた人が、ついに落ちて亡くなったとか、嘘かまことかそんな話が聞こえてきた。

そんなときは、じつとしておれなくて

「汽車の屋根には絶対上がらないように」と手紙を書いた。

届いたのか、届かないのか、分からなかったが、私はそうせずにはおられなかった。

夕方には、私の水汲の仕事が待っていた。

「兄ちゃん、早く帰ってこないかなあ」

下を向いて桶を担いで、ぼんやり歩いてきた。これから水を汲みにいくところだった。ふと、目の先に軍靴が見えた。兄はびっくりさせようと足音を立てず、坂道をそつと近付いたのだろうか。

見上げたその先に、懐かしい兄ちゃんの顔があった。

あつ、兄ちゃんだ。私は声も出せず、咄嗟に後ろ向きに走りだした。肩に担ったふたつの空の水桶がぶらぶらしていた、それだけを覚えている。

「兄ちゃんが帰ってきた！」

私は兄の帰りを叫ぶように家の中へ告げた。続いて兄が、

「ただいまかえりました」

縁側から兄は挙手の礼をした。見違えるように、日焼けしてたくましくなっていた兄がそこにいる。

開け放した縁側から、みな顔が見える。ちようど本家のおじさんも来ておられた。

「よう帰ってきたな」

おじさんはしみじみといった。おじさんは三人の子供を戦地に送っている。二人は中支へ、もう一人はビルマだ。

本家の人たちが来た。

「お帰りませ」

「ご無事で」

口ぐちにお祝いをのべる。

一人は長男の嫁、もう一人は、夫を戦地に送り、乳飲み子を抱えて嫁ぎ先から帰っている長女。

最初に兄が復員してきたことで、きっと全員が帰ってこられることを信じ、その日が一日も早くくる日を祈ったに違いない。

翌日から私は兄について回っていた。嬉しくて、嬉しくて仕方がなかった。軍隊で習った歌も教えてもらった。

「われは悲しきさだめに、カプリの島を思えばわが胸はなみ打つ」

歌詞は朧だけど、いまも覚えている。

★「なぜ」

戦火に追われるように、大阪から父の郷里、長崎県へ一家で疎開したのは昭和二十年、私が女学校を卒業した翌日だった。

従兄の世話で、日鉄鉱業株式会社、北松鉱業所の職員組合事務局に勤めることになったのは、私が二十一歳を迎えたば

かりのときである。

私が住んでいる鹿町村歌が浦の村落に隣接して、炭鉱の町は広がっていた。

当時は石炭産業の最も盛んな時代。北松鉱業所全体で従業員五千人、私の勤めている所でも二千人、と会社は隆盛を極めていた。

そのころ学卒の若者が東京で本社採用されて、この地にも赴任してきた。当時、佐世保からバスで二時間もかかる交通不便な田舎の鉱山に來た彼らは、翠明寮という職員寄宿舎で生活することを余儀なくされていた。

映画館もない、あるのはボタ山と社宅だけの地で、彼らは私たち女子軍とよく海や山へ遊びに行った。

片側の小高い山に灌木が茂っている。右手には畠が続いている。キャップランプを付け、手にはカンテラ下げ、顔を真っ黒にして抗内から出てきた人たちが、二、三人ずつ連れ立って私を追い越していく。

私は何時もは友人と連れ立って帰るのに、その日は一人で歩いていた。

「珍しい、今日は一人ですか」

と後ろから声が掛かった。その声は海や山に遊びに行く人ほどのグループ仲間の一人、安田さんだった。

一緒に歩き始めた時、彼は唐突に

「ボートに一緒に乗りませんか、今日」

と言った。突然のことで一瞬ためらったが

「誰か誘いましうか」という私に

「いいでしょ、一人でも？」

その眼差しには逆らえないものを感じた。

「いつも群れているから、たまにはいいかも知れませんが、二人きりのボートも」

海が大好きな私、ボートに乗れることが嬉しくて思わず声はずむ。貸しボート屋さんは村の神戸商店がしている。私のために人目を配慮したのか、安田さんは少し離れた浜から私をボートに乗せてくれた。

父の郷里は、西海国立公園より少し南よりの地。その小さい村は山と海に囲まれた風光明媚の地である。海は穏やかに陽にきらめき、夕風の海は鏡のような海面を輝かせて、時折その表情を変えながら暮れていった。

先程まで夕陽に光りさざめいていた銀色の海が、いつしか深い緑色をしている。安田さんは私の座る場所にハンカチを敷いてくれていた。ボートの漕ぎ方は上手で、なめらかに入江を出て広い海へ進む。

寮に戻って着替えてきた彼は、軍隊時代の将校さんのズボンをはいて、糊のきいた白いシャツにはアイロンがきっちりかけられていた。きれいな好きで几帳面な性格を垣間見た気がした。

安田さんは、私のおしゃべりによく笑って相槌を打ってくれる優しい人だった。父親がいないこと。弟、妹が二人いて母親と福岡に居ること。家族のことなど初めて聞く話だった。

「責任が重いんですねえ」

彼は黙って頷いた。

少し風が出てきた。安田さんのさらっとした髪がパラリと額にかかり、端正な容貌に一瞬、寂しい表情がよぎったのを私は見逃さなかった。

それから一ヶ月、会社でも道でも出会うこともなく、なんとなく日を送っていたある日、突然、安田さんの訃報が私を震え上がらせた。

銃口をこめかみに当てて、ピストル自殺をしたというのだ。身体が凍っていくようだった。「なぜ？ どうして？」

私はうわ言のように繰り返すのみ。

新聞には短く自殺の事を書き、ピストルは軍隊から持ち帰ったものを護身用に所持していた、と書かれていた。

白い真新しい布で両足をしっかりとくくってあったそうだ。その布は前日、炭鉱の購買部で買っていたのを誰かが見ている。もしその場で私と出会っていたらどうだっただろう。何かが変わったのではなかっただろうか。

会社の中でも、誰もが思い当たることがないとのことだった。享年二十八歳、将来を最も囑望されていた一人だったの

だと、その時知った。

周りの誰にも気付かせないで、翠明寮の一室で、自らの命を絶たねばならなかったほどの何があったのか。

安田さんは、なぜ私をボートに誘ったのだろうか。なにか話したかったのではないか。そのとき、すでに死を覚悟していたのだろうか。思い出多いあの美しい海を最後の見納めにしたかったのか。

けれど彼も楽しそうだった。

私の「なぜ」は深まるばかりであった。

★あとがき

「エッセー集『しゃがの花の咲く家』」を出版して早や十年の月日が過ぎ、私も八十八歳になりました。

この八十八年を振り返ってみて、悲喜こもごもの出来事の中でも、一番心に残っているのは、やはり戦争の思い出です。

昭和十六年十二月八日、全校生徒が運動場に集まり、二階の窓に取り付けられたラジオから戦争の勃発を聞いたのが、太平洋戦争の始まった日でした。女学校二年生でした。

従兄のガダルカナル島での戦死（戦時栄養失調症）つまり餓死。愛犬チロの供出、玄関前ですぐ殺された。学徒動員で

五年生だった一年間は軍需工場で弾丸の検査をしていた日々。

また徒歩通学だった私は真夜中でも、警戒警報が発令されると、怖くても学校を守るための命令で、学校へ馳せ参じました。

警戒警報から空襲警報に変わり、灯火管制下の真つ暗な誰一人も通らない広い勝山通りの夜道を、ただ一人走って学校へ飛び込んだことは、一生忘れることはできません。

その後一家を挙げて九州へ疎開し、私達一家の運命も一変しました。

少しでも自分の体験したことを書き、戦争を知らない子供達や孫達にもぜひ残したいと思ひ立ちました。

拙い文章ですが、お暇な折に読んでいただければ幸いです。

(二〇一六年七月、自費出版された本「戦争と一条通り」の一部を、このたびの戦争体験の聞き取りに応じて頂き、転載とさせて頂きました。)

追記

「平和の礎」五集の編集委員として大西節子さんとお会いした時、大西さんは昭和三年のお生まれで、間もなく九十歳になられるとのことでした。ご自分で原稿を書くことはご無

理と申され、以前出版された本からの転載でしたらと、お引き受け頂きましたので、忠実に、転載させて頂きましたことを付け加えます。

『聞き取り』

日時 平成二十九年二月七日・三月十日

場所 大西さんのご自宅にて

出席者 玉井・住井



戦時中の追想

奥角 長生(森北)

私は一九三二年三月七日、大阪府北河内郡交野(ここの)村大字倉治一七七八番地で生まれた。

生まれる前年九月に満州事変勃発、生まれた一九三二年三月満州国建国、一九三七年七月、日中戦争に突入した。戦時中の思い出を小学校入学時から中学二年の終戦の日まで綴ってみた。

一九三八年四月交野尋常高等小学校(所在地は現交野市役所)に入学した。その時から強力な軍国教育を受ける事になった。全校朝礼で、皇居遥拝、国旗掲揚、国歌斉唱、校長の戦意高揚の訓辞が毎日続いた。天皇陛下は上御一人(かみごいちにん)、現人神(あらひとがみ)、一天万乗の君(いってんばんじょうのきみ)であり、我々臣民は天皇の赤子(せきし)である。天皇絶対、軍部独裁の政治が小学生にも徹底された。五年生六年生では体罰を伴う非常に厳しい教育訓練であった。

高等科の学生(現在の中学生)が、陸軍少年飛行兵、海軍予科練習生に志願した場合は、朝礼で本人を顕彰した。又

訓練中の卒業生が来校し、講演した。

一九三九年三月、枚方禁野の陸軍火薬庫が大爆発し、人々は逃げ迷い、我々も山へ逃げた。数日間空を真っ赤に染めた。

一九四一年十二月八日、米英に宣戦布告し、太平洋戦争に突入した。八紘一宇(はっこういちう)はっこういちう、全世界を一軒の家のように仲良くさせる)大スローガン下、多くの標語が作られた。聖戦完遂、一億一心、撃ちてしまむ、欲しがりません勝つ迄は、進め一億火の玉だ、等々。金属製品は供出させられ、物資は配給制になり、敵性言語・音楽・書物も禁止された。

小学校の六年間、早朝には出征兵士を見送り、午後には英霊を迎える日が、年月を追って増えて行った。約二キロの通学路の途中の或る家で、出征兵士の家という銀色の表札が一枚二枚と増え、それが英霊の家という黒色の表札に変わっていった記憶もある。

現在の大阪市立大学理学部付属植物園は、戦時中、満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所で、包(ぱお)というモンゴルの饅頭型組立式の家があった。卒業した義勇兵(15歳〜16歳)が、私市駅から満州に旅立つ時、我々小学生は最寄駅(私は郡津)で見送った。

一九四四年四月、四條畷中学に入学した。格別に厳しい教育訓練が待っていた。朝礼では、君が代に加えて第二の

国歌と言われた「海ゆかば」を斉唱し、忠君愛国の精神を叩きこみまれた。特に配属将校の軍事教練は苛烈であった。一九四五年三月、満十三歳の男全員が交野国民学校に集められ、海軍士官と下士官の二名が来校し、兵役志願の誓約をさせられた。

一九四五年四月、学徒勤労動員令により、四月五月は陸軍香里工廠で爆薬製造に従事した。当時香里丘一帯は広大な火薬製造所であった。六月から八月十五日迄は松下飛行機製造所（大東市朋来）木製飛行機の製造に従事した。

一九四五年に入って空襲が激しくなり、昼夜を問わず数百機のB29が飛来した。夜の空襲では、大阪市街方面を遠望すると、燃え上がって真っ赤に空を染め、凄まじいものであった。小学校同級生大北吉次君（城東工業在学）が勤労動員先の工場で、焼夷弾に直撃され、死亡した。帰りの汽車で偶然乗り合わせた星野信弘君（大北君と同工場働いていた）が悲痛な面持ちで語ってくれた。後年、大阪大空襲展で彼の戦闘帽が展示されており、涙を禁じ得なかった。

我々も勤労動員先で時々空襲警報が出され、その都度対応に追われたが、我々を引率されていた担任の染田一雄先生（津田駅前在住、二〇一一年一〇三歳で逝去）は我々生徒を待避させるのに苦慮された事を思い出す。幸い直接の爆撃を受けなかったが、艦載機（空母から発進する戦闘機）

が時々飛来し、超低空で機銃掃射を繰り返した。長尾で父の知人が家の中で壁を貫通してきた銃弾で死亡した。三月十日の東京大空襲、三月十三日の大阪大空襲、三月十七日の神戸大空襲、等々全国の一〇余の都市が焦土と化した。我が国土は戦場であった。終戦前日の八月十四日、大阪砲兵工廠（現大阪ビジネスパーク、城見町一帯）が爆撃され、京橋駅ガード下に避難した人々が犠牲になった。駅南に慰霊碑があり、毎年供養されている。

そして、八月十五日正午、炎天下の工場の広場で、終戦の詔勅の放送を聞いた。三〇〇万人に及ぶ尊い命の犠牲の末、戦争は終わった。

命の尊さ・平和の尊さを心に刻みたい。日本国憲法は幾百・千万人の尊い生命の犠牲の上にある。戦後六十九年、日本は不戦と民主主義の平和憲法を守り不戦を貫き、世界の国々からも認められてきた。この世界に誇る日本国憲法がいつまでも遵守されることを願って止まない。



満蒙開拓義勇隊開拓団の記録

喜多嶋 豊次(星田山手)

前編

★誕生から義勇軍へ

大正十五年二月七日、男なら六番目、順番に勘定したら何番目の子か親もわからなかったと思う。

まったく望まれない誕生、貧乏人の子沢山赤貧洗うが如きだったと思うが、粗製乱造のためか親の七光りや兄弟姉妹のお蔭でという部分がまったくなかった。勉強なんてなんでするのか、親もあまり関心がなかったと思う。親父は勉強よりもしつかり新聞を隅から隅まで読めと勧めてくれたお蔭で、今でも二時間は新聞に時間をかけている私です。学校の勉強にも日露戦争大勝利の影響もあって、日本は神の国で現人神、天皇陛下がおられるので戦争には絶対には負けない、最後には神風が吹いて敵には徹底的な打撃を与えてくれるとか、かつての元寇の例(十三世紀)を繰り返し教えられた。国民の総てが必ずそうなると信じていた。武器よりも大和魂が優先する精神教育で終戦までに沢山の若者が散った。

入学する一年生の頃に、満州事変が勃発、これも日本が仕掛けた事でもあった。徐々に軍部の台頭が始め、戦争へ競争へと機運が高められた様に思う。遂に小学校六年生になった時、日中事変が起る。学校の勉強どころか出征兵士を駅まで送る毎日、体操の時間は山で軍馬の草刈り、栄養不足だと田圃のいなご取り、兵隊が増えるに従って食糧も当然増える筈が、大事な働き手を取られて百姓は四苦八苦、其の上、中国の戦局も拡大するにつれ戦死する人も増え、送る人より遺骨を迎える日が多くなっていく。

昭和十五年三月は高等科の卒業式、そんな或る日、担任の村井先生に呼び出され、ちよつと役場へ行って見ないかと誘われた。役場なんて普通行く場所でもなく、黙って不思議顔でついて行った。確か四、五人が同行した様に思う。ところがである、何回か見た事のあるどでかい看板「満州開拓青少年義勇軍募集」若者よ、大陸に雄飛せよ、赤い夕日満州は君等若人を呼んでいる、国防服に巻脚絆、鍬の柄を銃の代わりに凛々しく夕日を背にした義勇軍のポスターが貼ってあった。なにげなく見ていた私の血は、なぜか瞬間であったが躍った。よし俺はここにどうしてもいくぞと決めていた。俺の居場所もない日本より満州の広野に十町歩の大地で思いきり働いてやろう、心は既に大陸に翔んでいた。後日、親と相談して、この書類に印鑑を捺して学校に持ってくるようにと願書を書かれた。(当時、学校には二、三名の割り振りがあつ

たとか。富山から大阪に働きに行くのに近所から餞別をもらう時代、異国の満州に行くのに親に相談なしに子供に願書を持たず、どう考えてもおかしい。親父は子沢山で一人位は遠い異国でも政府が面倒を見てくれるのなら助かる位の気持ちか、「十町歩もあつたら飛行機で島の見回りをするのやろうか」「俺の生きてるうちに満州に行けるやるか」と態度から見て賛成だった。が、母親は小さい声で満州は危ないとこるやろと盛んにこぼしていた。誰かがはつきり満州事情がわかる訳じゃなし、みんなが行くところだから心配ないやろが一致した意見だった。親父は一言もぐちらず願書にハンコをくれた。願書の手続きが済んで身も心も未だ見ぬ大陸に翔んでいた。早く卒業したい。

満州開拓青少年義勇軍内原訓練所入所。昭和十五年に第一次義勇軍が出て、私のころは第三次義勇軍となり各府県単位の中隊を組む程、志願する者が増加していた。志願すると言うより家を相続する必要のない次男、三男はその標的となった。

昭和十五年三月三十一日付で第十七河原中隊が編成された。訓練所で二月から九月まで満州に対する知識や集団生活、匪賊に対する銃の操作、開拓農民の心がまえなど、当時十五歳はまだ親恋しい年頃、洗濯から釘つけ、六ヶ月外出もなく日曜日は兵舎周辺をぶらぶらするだけ、そんな淋しさや困難に耐えて演習場一杯に繰り広げられる壮行会、いよいよ待望

の憧れの満州国への旅立ちだった。

宮城前広場で聖寿の万歳、九段から靖国神社参拝、ま新しい制服に巻脚絆、水筒、鍬の柄を肩に堂々の市中行進、何処かで親も見ているだろう、晴の雄姿を見て下さい、あの悪童も今は立派にお国の為に出発します、胸を張って行進したと思う。

郷土の港、伏木港から射木丸という三千トン級の貨客船で、船の別れはドラの音と蛍の光、眞黒に埋めた人の波、五色のテープが乱舞する。送る者と送られる者、別離の悲しみはなく、希望の船出だった。

二日程で朝鮮の仁川港に着く。台風シーズン、日本海は荒れ狂い三千トンの船は木の葉のように翻弄された。死ぬ思いの船旅より二本足で土の上に立ったことが嬉しかった。仁川港から次の清津港、そこから汽車の旅である。夜ともなると窓のカーテンを引き、灯が外に漏れないように注意が出て、この列車の灯を目がけて弾丸が飛んでくるのだそうで、又列車の先頭には別に機関車が走っていて、鉄橋の爆破や線路の破壊を探知する犠牲車だとか。上陸早々から言いようのない緊張が体を走る。二晩の旅でようやくハルピンを抜け、最果ての地、黒龍江省対店県海倫駅に着く。

果てしなく広がる大地に小さな駅、五十軒の民家が集落を作っている様子、珍しそうに群がる汚れた親から子供、古くても珍しいトヨタとニッサンのトラックに便乗し出発。これ

が難問、当時のトラックは五十人も乗せて道なき道を走る様には出来ていなかった。ロープで引張る、押す、それが到るところにある、僅か二十里の道を夕暮れにやっと到着である。日本を出発して九日目、立木が一本もないならかな丘、ふもとに川とも沼ともつかぬ湿地帯があつて、点々と赤煉瓦と四角の建物が並ぶ。殺風景な訓練所。

昭和十五年九月一日、満州開拓青少年義勇軍対店訓練所の第一夜を迎える。遙か向こうに小興安嶺が続き冬の燃料の心配はなさそう。零下四十五度近くにもなる酷寒の地、燃料不足は決定的なダメージを与える。燃料木材も冬は氷るので堅い。電動鋸がある筈もない。二人引きの鋸で一台に丸太三本乗せれば上々の一日仕事で、危険なため一人は銃を持って立番で、冬は大変な仕事である。春ともなれば、名もなき花が競い、総ての苦勞も忘れる季節でもあつた。夕方近くになると地平線まで続く平原に、眞赤に染めて大きな太陽がぐんぐん沈んで行く。高粱（コーリヤン）畠はあかね色に燃え、雷にでも打たれ金縛りにあつた様に動くことも出来ず、落日に見とれ跪きたくなる荘厳な光景だつた。この時期は又、大豆、馬鈴薯、トウモロコシ、小麦、種蒔と除草作業と続く地平線の彼方まで続く長い畠、この畠だつて荒地を重い開墾鋤と馬とで作り上げたものである。

屯懇（トンコン）病（内地に帰りた、仕事にならない連中がどんどん増える。父死んだ、母死んだ、質電報がくる）

かつて内地で募集の時に見た映画では、トラクターでみるうちに荒地が畠地になり、麦の刈取りも大きなコンバインとか言う収穫機で袋詰めまでの一貫作業だつた筈。ところがこの機械がある事はあつても故障しているのか大きな凶体を雨ざらしにして青く錆びていた。

カンカン照りの大地、女の子一人いない、他中隊とのいざこざで勝手に銃を持ち出してぶつ放す。誰もが抑え様のない不満が蓄積していた。内地で描いた大きな夢は徐々にしぼみつつあつた。

「何が十町歩の大地主や、何が若人よ大陸に雄飛せよだ」無茶苦茶に腹が立った。騙された。開拓団が襲撃を受け、妊娠している奥さんの子供を引っ張り出して砂利が詰められていたとか、時々そうした情報が入ってくる。生命に対する恐怖、今迄の不満のうっ積は、形を変えて爆発していった。



★爆 発

気に入らない幹部の襲撃をする他、中隊同士の喧嘩、食糧倉庫は破る、およそ内地にいたら想像もつかないことが日常茶飯事の如く行われた。

それが十五歳から二十歳に満たない若者である。

五族協和（日滿韓鮮蒙）王道楽土、大東亜共栄圏建設、言葉は綺麗でもその陰の部分には正に侵略者か、征服者を養成する訓練所だった。自動車のスプリングを切断して八寸位のドスを作り腰に差し込んで一人前の大陸浪人のつもりでいた。入所当時は大陸の総てが珍しかった。

二年目頃には総ての遊びに飽きてこわいものなくそ度胸だけが出来ていた。壮大な夢と希望を持って、お国のためと送られて出て来た身体、今更おめおめと帰れるか、でも帰りたし、悶々の日を送っていた。

日支事変の進展は今だに忘れられない。四十八年前の戦慄すべき事実である。既に昭和十二年七月、日支事変が勃発し不穏な空気が満州全体を覆っていた。

訓練所には、二千人近い訓練生がいて、厳寒の北満では食糧以上に大切なのは薪で、その薪を伐採する為に沢山の満人労働者が小興安嶺の山深く入っていた。その人達を警備する為に私達も同行していた。

河も沼もトラックがゆうゆう通る程完全に凍結していて、警備以外は氷滑りや魚釣りの毎日。

ジュウ、ジュウ音を立てながら大きな囲炉裏の中に為体の知れない物が二本の串に刺され焼かれていた。どう見ても豚や鹿の肉ではないようで表面は焼けていても中は柔らかいようで焼け上がった肉を食べないかと勧められても誰一人として手を出す者はなかった。フウフウ息を吹きかけて食べている精悍な面構えの男の手元を見ていた。

彼等のことは、日頃から日本で食いはぐれとか、大陸浪人とか言う人らしく、食べ終わった彼の口から驚くべき鳥肌の立つ話をきかせてくれた。

今食べた物は人間の脳味噌だと言う。回りが総て敵国人の中にあつて、いつ寝返つて襲われるか分からない状況の中では、自分の地位や力を誇示する方法として、監督の指揮に従わない満人を殺し目の前で脳味噌を食うのだと言う。

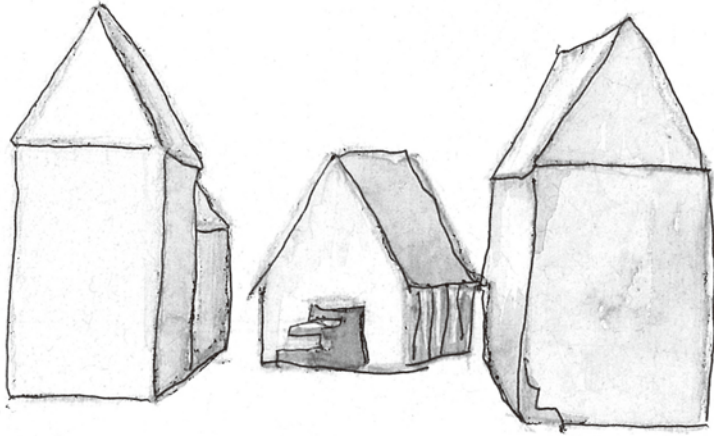
正にそれは事実だった。二メートル近い穴の中に二人の満人が殺されてほうりこまれていた。頭は割られ中は空っぽ。

五族協和、王道楽土の建設を大義名分に満州を侵略した日本。

其処には、常識も人道上也許されるものは何もなかったことをお知らせしたいと思ひ、ペンを取りました。

断片的に入ってくるニュースと内地からくる手紙以外知

る由もないが、昭和十八年すぎ位から満人の話す言葉、対応に違和感があつて、彼等は中国戦線の状況を察知して遠からず日本は負けると読んでいたと思う。十五歳で入つて十八歳、十八歳で入れば徴兵検査で抜けて行く開拓団の現状は充分に知つていたと思う。残つていて、田圃も畠も出来ない老人や、女、子供では、何処から見ても解る。



★大東亜戦争突入

忘れもしない年の暮れ、十二月八日、真珠湾攻撃に続き、米英と宣戦布告とのニュースが入つて来た。しかし未だ兵隊検査に少々間がある連中ばかりは、あまり悲壮感はなかったし、アメリカやイギリスなんか一年もしたら戦争なんかとつくに終わっていると誰しもがそう思つていた。



★父の死

昭和十九年二月の或る日「チチシス、スグカエレ」二か月遅れの電報を受け取った。

まさか半信半疑だった。友達が勝手に仕組んだ芝居だと屯懇病も病が嵩じてくるとよからぬことを考えるもので、郷里に里帰りする方法は一つだけあった。両親が危篤とか死んだと偽の電報を打ってもらったことだった。父が病気だという手紙も来てないし、突然死ぬ歳でもないこと、郷里に帰れる嬉しさの反面、気持ちは複雑だった。

二月だと言うのに田舎の家は雪の中、遠い満州から帰ってくる息子の為、母の心遣いか、床の間に四十九日もとづくにすぎた父の骨壺と造花の祭壇が残してあった。とたんに喉に熱いものがこみ上げてきた。出発の時、公園で顔を見ただけで一言も交わすことなく別れてしまつて、こんな姿で再会するとは。

「遠い満州を自分の足で歩いて見たいと言っていた父」
背負ったリュックサックも降ろすことなく泣きくずれていたとか。葬儀の休暇で少し位は延期の腹づもりがさっぱり面白くなく、早々に満州に帰る事になった。

戦争の厳しさはこの片田舎まで押し寄せ、衣料切符、食糧配給、煙草、酒、砂糖まで町々に貼つてあるスローガン「撃ちてしままむ」「欲しがりません勝つまでは」「パーマネントはやめましょう」「贅沢は敵だ」。

昭和十九年二月十六日クエゼリン島玉砕、七月七日サイパン島玉砕、八月四日ビルマのミートキナ玉砕、八月十日グワム島玉砕、レイテ沖海戦連合艦隊壊滅。

三年間の義勇隊対店訓練所の開拓団移行への基礎訓練も終わつて既に移行先が決まつた。昭和十八年二月十一日紀元節の日、浜江省五常県南沖河が移転先である。近くには、郷土の砺波開拓団と群馬開拓団があるとかで非常に土地も肥えて田舎に似たところ、引率の拓務省の幹部曰く、貴方方の土地はあの山からこっちの山までです。他所様の土地に来て勝手に土地の割振りを決めて平気で振舞つていた。終戦後のあの暴動は、こらえていた民族の抑圧の爆発でもあった。どの位の土地なのか、富山県の一つの大きな郡ほどであったと思う。ほぼ三万七千町歩。

遂に兵役は一年繰上、十九歳から。大学生も当然の如く戦場へ。徴兵検査が五月ハルピンの小学校で行われた。甲種合格なら身長五尺五寸(一八〇センチ)体重十六貫(六〇キロ)は必要である。日本男子なら誠に名誉であり家の誇りであるが、悲しいかな、卒業から十センチ少々の伸びで一メートル五十五センチ、ともかく第一乙種合格で立派な兵隊さんである。

既に沖縄に米軍が上陸し死闘が続けられ、先輩は南方へ南方へと送られていたようだ。昭和二十年六月二十三日、日本帝国陸軍最後の兵士として入営する事になった。しかも昭和

二十年六月二十三日は沖縄戦終焉の日である。十五歳から満州にいてクソ度胸もあり、日頃から軍事教練を受けていた関係で、内地から来た青白い初年兵と違い小生意気でよく殴られた。

入隊して一ヶ月間はまったく無我夢中で夜の点呼が終つて消灯までの間は、初年兵にとっては正に地獄で、その日の反省が消灯までの間に消化されるのである。先ず銃の手入れで掃除などの言葉はもつての外、銃口にゴミ一つついていても顔の形が変わる程殴られる。三八式歩兵銃には菊の御紋章が彫つてあつて畏くも上、天皇陛下より貸与されたものであるとの自覚である。起床喇叭と飛起き毛布三枚をたたみ、駆け足で営庭に整列、先頭から十五番位迄があたり前で十六番から後からの兵隊は営庭を駆け足で一週させる。遅れる奴は更に一周となる、ようやく終る頃は先に帰った連中は食事が終つて演習準備、遅い奴の食事は残飯を桶にポイ、これが日常茶飯事で朝起きてから消灯、ラツパが鳴つて毛布にもぐるまでが必死の毎日、一人の失敗は全体の責任となり、全員整列対抗ビンタ、加減しようものなら見本に引つ張り出され猛烈な一発があごに飛んでくる。いつも口の中が切れて味噌汁が染みていた。

通信隊だから朝起きたら食事をしろ、煙草は吸つてよし、休憩してよし、総てモールス信号で始まる。通信隊だから致し方のない方法でも、頭の悪い運動神経のにぶい奴はどうし

ようもない。モールスが取れた頃には既に出発準備で、飯は残飯桶にポイである。食べても腹の減る年頃、飯の恨みは未だに消えることはない。

明日もわからん若者の命、せめて食事位は充分に喰わせて欲しいと幾度思つたことか。

★別離

そんな騒然としたある晩、私の付人であつた松本上等兵が私を呼んで「喜多嶋、お前は出動名簿から外してお前と俺は隊に残るぞ」一瞬それがどんな意味を含むものか神ならぬ身の知る由もなかった。入営してから四十一日目、一発の弾丸も射たず射つ方法も知らない兵隊が本土防衛か南方方面に出動して行く。真夜中に黙つて出て行く仲間、贈る言葉もなく見送る私。俺が死んだら骨を頼むぞ、お前が先に逝つたら必ず骨は俺が拾つてやる。問わず語らずにいつの間にか、そんな仲間意識が出来上がつていった。短い訓練期間、演習に追いまくられ、お互いに故郷を語る暇もない初年兵生活、別れ別れにでて行くみんなといつの日にか再び会う、そんな機会があるだろうか。



★零戦の自爆

八月九日、早朝急に兵舎内が騒がしい。何事ときくとソ連の機動部隊が満州里の国境線を突破して南下中との公電が入ったとかで、さあ大変、部隊の中樞がほとんど本土防衛に出動し機能が麻痺している部隊は一体どうなるのか。それから一週間後、遂に終戦のラジオニュースが入る。その直後、街中からバン、バン銃声、ワアーと言う喚声上がる。暴動が始まったのか、ぞろぞろと満人があたりに増える。不気味な雰囲気の日毎につのる。終戦から四、五日目、昼飯も終りかけた時、キーンと凄い金属音と共に窓越しに零戦が低空で飛んで来た。隣の窓から零戦やの叫び声。真青な空に日の丸が鮮やか、一機また一機、急上昇しては反転し燃料集積場に自爆する。ズダダン、ドドーン。物凄い火柱と共にドラム缶が宙に舞う。真黒いもうもうたる黒煙の中に四機共自爆した。息も止まることとはこの事、身体中が凍りついた。見た事もない事実を目の前にして声もなく、動くことすら忘れる瞬間でもあった。

この十日前には、突如ソ連は日ソ不可侵条約を破棄し、アツと言う間に此処、北陵飛行場に進駐して来た。兵舎の外では、満人の暴動に身動き取れず、夜毎、略奪にくるソ連兵におびえる毎日、勇敢なる零戦に胸の中のモヤモヤがふつとぶ、日本男子此処にあり、大和魂とは、これなり。

復員時、新聞紙上で此の事実を伝えたく捜して見てもわか

らなかつたが、ようやく満州第二航空隊陸士五十七期生、鎌田大尉、後藤幸久、西谷真之、福田滋、氏の四機と判明、合掌。

何処、其処の憲兵隊が襲撃され奉天駅に死体が並べられているとか、恐ろしい情報がぞくぞく入ってくる。兵舎周辺の将校官舎から、一般邦人の家が襲われ逃げ回っている女の姿も見える。盗んだ荷物を荷車や肩にゆうゆう兵舎の前を通る満人の姿が引きもせず、日を追って多くなってくるようだ。夜、腹を立てた兵隊が入りこんで来た満人を防空壕に放り込んで木銃でつき殺し、半殺しのまんま生埋めにしたとか。殺気だっていた兵隊。

その夜、又しても忘れられない三回目の事件が起きる。本隊が数日前に本土防衛の為、夜のうち大部分の兵士が移動し、其のあと中国戦線から本土防衛へ出発する兵士が次々と入って来ている最中で、私如き二ヶ月前に入営し、弾丸一発も射つ事もない兵隊の私其の日は部隊長室の当番である。部隊長（藤田少将）、本来部隊長室の当番は古い兵隊が歩哨に立つのが普通だが、数日前に本土に移動したために私に回ってきた様子。二階の部隊長室の前に古い兵隊、私は一階入口の歩哨である。当然弾丸をこめて銃を持つての立番である。毎晩の様にソ連兵が酒に酔って略奪に来るが、まさか部隊長室は警備が厳重だとの報道がされていると思っていたが、なんの事九時すぎ、大きな声と共に入口の戸を蹴とばして入っ

て来た大きな男、ドタ靴の音が板の間の廊下に響く、素早く私は階段の下にかくれた。本来なら入口の私が当然立会う場である。二階に上った途端、誰か、誰か、誰か、と三回、歩哨が叫んでいる。きまりでは三回呼んでも返事がなかったら射つてもいい事になっているが、酔っぱらいの場合はどうなるのか？終戦で戦闘が終了し、一応これからの処分待ちの我々、此の事態は大変な事になりそうな気がした。相手はソ連軍、話をして解る相手ではない事は充分承知：私達はすぐ隊に帰って休んでおれとの事で引揚げたが、若し当事者としてソ連から呼び出しがあったらどうしよう。銃殺にでもなったら日本軍規なんて何の役にも立たん。眠られぬ夜。

次の日、何処からともなく此の話が入って来た。本隊が移動して残っている兵隊が少ないせいでもあつての事だろうが、結局毛布でぐるぐる巻きにし、当時広い兵営の中には防空壕が多く掘ってあつて、其の内の一つに入れ完全につぶし防空壕を平地にしたとか。

ドドンと一発の銃声に命を落としたソ連兵も又、大戦の犠牲者だと思ふ。大きな声を出して二階から転がり落ちて来たソ連兵、口から血がドクドク吹き出している。時々あの時が目の前に現れるが。

★昭和二十年八月二十四日

帰国（ダモイ東京）と騙され強制抑留の罫

さあ、大変な事が起こって、降って湧いたような災難に上層部は困ったと思う。私の想像だが、行方不明のソ連兵を捜しに奴等はくるだろうし、何処からか話が漏れる心配もある。急遽、部隊の移動が発令された。当然、帰国が早まったと勘違いする人もいたと思う。終戦と同時に放出されていた新品の軍需品の山、上は将校から一兵卒に到るまで、内地は生活物資が不足しているからと、シャツは二枚も三枚も重ね着し靴下も何足もはき、其の上靴下、石鹸、米、これでもか、これでもかと押し込んだ背囊の中は、持ち上げるだけでも相当の重量だ。

こんな苦勞しながら日本に帰れると言う欲の皮のつつ張った関東軍のなれの果てである。靖国神社の櫻の木の下で会おうの合言葉は何処へ行った。帰国と言う一番の願いもまったく嘘八百、これが判明する迄終戦から二十日かかっている。あと一ヶ月もすれば厳しい冬、それまでは内地の土が踏めるだろうか？冬を目前にして心細い日が続く、いつの間にか口スキーの指揮下に入ったのか度々人員点呼が続く。ヤポンスキー（日本人）東京ダモイ（帰国）どのソ連兵も口にするからこちらもすつかり乗せられた。あれがシベリヤの奥地に連れて行って石炭を掘るんだとなつたら、戦争には負けていても暴動の一つも起きていたと思

う。

東京ダモイにすっかり騙され北の果て黒河、普通なら奉天から丸二日位の處、それがハルピンをすぎ北滿へと列車は北上する。これは黒龍江を渡つてウラジオオストック經由しての日本帰還だろうと、いつの間にかストーリーが勝手に出来上がっている。

黒河に着いたら沢山のテントが並んで兵隊が薪で食事の準備をしている。寒いと思つてしていると曇が降る。もう九月に入つたらしい。目の前は、濁流渦巻く悠久の大河黒龍江、感慨ひとしお、観光旅行なら感極まつて泣き出した事だろう。遙か向う岸には、ソ連人らしき人影が見える。川幅はせいぜい一五〇メートルか二〇〇メートル位、水陸両用舟艇らしい。一度足を滑らせたなら助かる見込みはない。日本の捕虜のために命をかけて助けてくれるソ連兵はおらんやろ。黒河を渡ればソ連領、東京ダモイどころか山奥に連れて行って使役だと九人の兵士が脱走したらしいが周囲が満人の中、たちまち捕まつてみんなの目の前で銃殺されたとか。恐い話、逃げて殺されるなら一か八か渡るしかない。

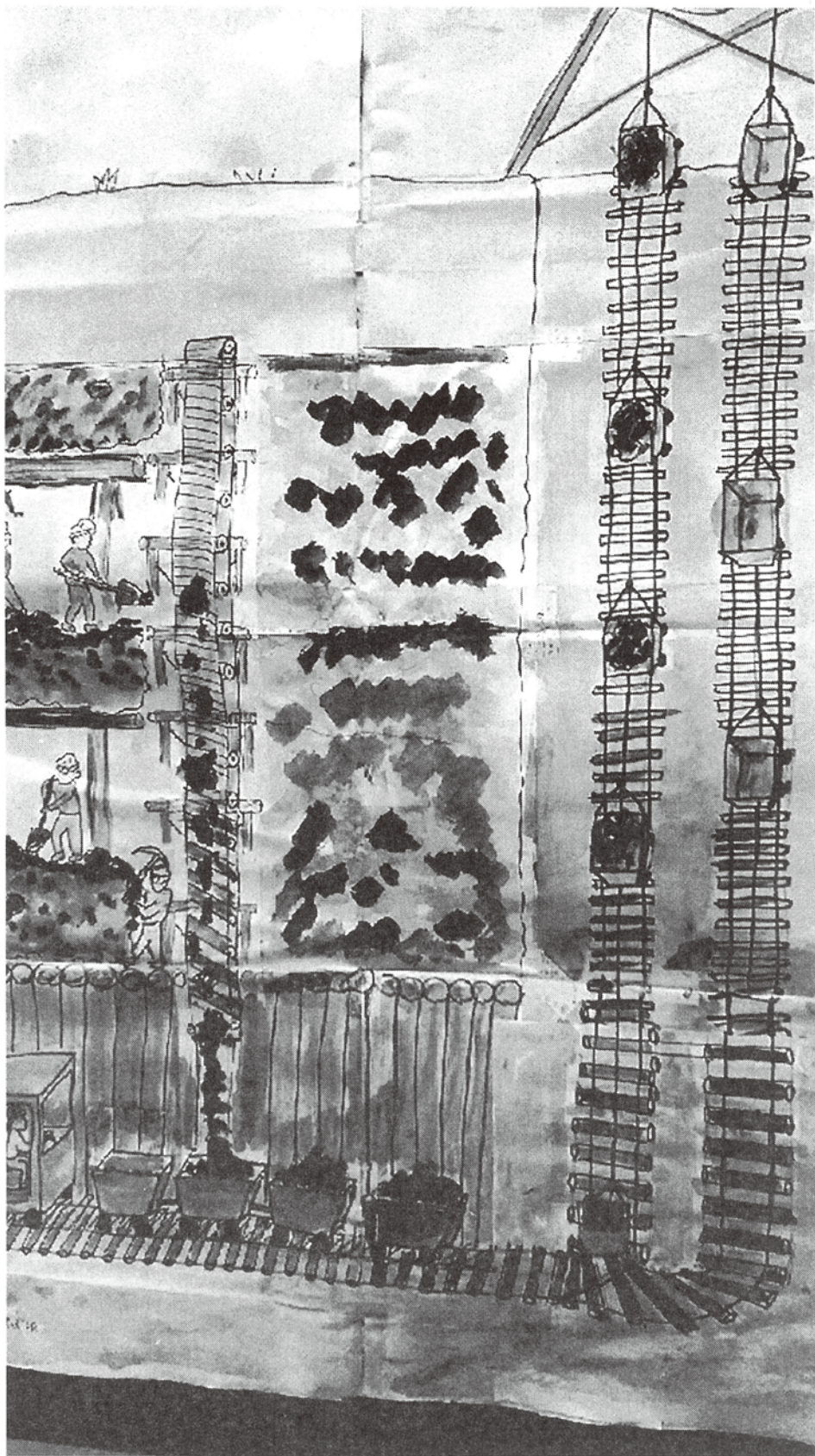
黒河を渡つてから長い長いシベリヤ囚人列車の旅が続く。改めて捕虜と言う現実に泣き、日本帝国軍人として有史以来の捕虜生活を体験する事になる。奉天から二十日余り、運動不足とパンだけの食事では最悪の状況に近い、足元がふらつく。囚人貨車の中は、一階と下で鉄板の上に板を敷きこころ寝

である。トイレは入口が十五センチ位開けてあつて、木の樋が出ていて中から垂れ流しである。入口近くで寝ている者にとつて、ここから吹き込んでくる風で使用中のしぶきに悩まされる。大のほうはもつと深刻、停車駅で飛び降りて用を足す。何分停車するなんて知らされていないから、動き出したらその途中でも飛び乗る。貨車がでかいから当然入口も高い、体力がないから中から引き上げて、ようやくはい上がるのである。

来る日も来る日も相当のスピードで原っぱを抜き、から松林をつつきり、人家も見あたらないシベリヤの荒野をひた走る。一体何処に運ばれていくのか、屠殺場行の動物の如き心境で神佛を信ずるより方法がなかった。いつしか東京ダモイの声も消え、出るものは太い溜息ばかりである。ロスキーの手真似では集団農場で馬鈴薯を収穫するらしい。手真似で土を掘る格好がジャガ芋が石炭に変わっただけである。

三十日過ぎた頃、列車の左右に大きなボタ山が沢山見える。このボタ山すら始めは何であるかも知らなかった。ここで全員下車となり黒河以来ようやく土の上に降り立つた。ここがカザフ共和国カラカダ第六收容所で、丸三年間お世話さまになる。五十日近い輸送の疲れも、彼等に取つて日本兵はソ連の労働力の不足を補う単なる消耗品だった。

(喜多嶋さん手描きによる坑内の様子)
地下八〇〇米位、一日八時間、石炭一〇〇台がノルマでした



★入坑

旅の疲れを癒す暇もなく炭坑の人員割当があつて、入坑は三交代勤務である。どういう具合に働くのか、まったく見当がつかない。また、こんなものかと思われる石油ランプ片手に急な坂道を下る、ところどころ水が噴き出していて足が滑る。こけると石油ランプが火の海で、八時間働かねばならぬのに、真暗い坑内に取り残されて半泣きのときもあつた。

ミキミキバシバシ地球の重圧で柱が割れる音、背の高さもある柱が土の中にめり込んでゆく。日本兵一名にロスキー一人がつき八時間、訳のわからんロシア語で休まんと働けと脅す。大声でわめく隠れ場所のない穴の中、追い回され汗をかく上衣をぬいで暫らくするといつの間にかロスキーに盗まれることが度々起る。

どうせ負ける戦争なら豊かな国に負けたらいいと思つた。既に二ヶ月にもなるのに未だ軍隊組織のまま古い兵隊が威張っているし、上級将校は仕事にも行かず遊んでいるのが、やたら目につく。疲れて炭坑から帰る兵士の食事より将校食は、肉の量が違う。

こうしたことが兵隊の不平不満がうっ積してゆく。これがソ連側のつけ目だったようで、始めから計算づくであつたと思う。自然発生的に起つた如く装うソ連の狡猾さ、そうしてやがて将校も下士官も兵も、平等で仕事をする仕組が出来上る、これがソ連側の言う民主主義の原点だと言う。三交代だ

から三人の班長が必要で、僅か入隊して半年足らずの二等兵の私を選ばれる。

炭坑は、国営企業で軍隊よりも権力が上の様で、炭坑からの指示で指令を受けた様だった。一緒に働く兵隊は中支戦場から本土防衛に回され終戦に依つて一緒になつた猛者共の中から班長である。世が世であつたからこの連中に殴られる運命にあつた筈。「働かざる者喰うべからず」のお国柄、炭坑労働者で七五〇g、水気が多く麦は燕麦と言つて馬の飼料である。然も機械が悪いのか麦の殻がやたら多い。七五〇gは片手で握れる程、一度に喰べると後はスープ一杯のみの食事である。

一年もすぎ二年目ともなると次第に捕虜生活にも馴れ、石炭掘りも板につき言葉も理解出来るようになる、ロスキーの乱暴も次第になくなり炭坑の業務も日本兵にまかせるようになった。

そうこうする内に収容所二五〇〇人の中から何処からともなく社会主義のイデオロギー共産党に対する研究を目的とする募集があつた。

誰が何の為にそんな事を詮索する暇もなく、私は躊躇する事なく申し込んだ。若しかして共産主義に共鳴した様な顔をしていれば、優先的に帰国出来るかも（それと言うのも以前の義勇軍は完全に植民地の支配の尖兵でもあり、田舎では小作人で地主に取れた米百俵のうち六十俵を持って行かれる

小作人の倅、材料にはことかく事はない、大變な自信)。グループの仲間には、学徒出陣の学生あり将校もいて、それぞれの腹の中を覗き見る事が出来なくとも、大なり小なり同じ気持ちがあつたと思う。

炭坑から疲れて帰つてもハバロフスク発行の日本共産党史の勉強である。年一回収容所長の支持で二五〇〇人を集め弁論大会もあつて、二等賞を貰つたり機関紙の題名に応募して当選した事もあつて、名前も売れて知られる様になると「日本に帰る時、氣つけや」とか「日本海を泳いで渡るんか」と脅迫される。然し今は捕われの身、ソ連に共鳴する者は絶対無茶なことはされへんと言う打算もあつたし、うまくいったら一足先に日本に帰れるかも、そんな狙いも腹の中には十二分にあつた(これがばつちり当つてしまった、二十三年八月頃の話になる)

炭坑も三年もすぎると一人前の採炭夫で炭内の中なら何一つ恐いことはなかつた。地下七、八〇〇メートル位で比較的浅く、採炭ベースもよく常時ノルマを達成する程めぐまれた炭坑だつた。これも民主グループに割り当ててくれたソ連側の配慮だつたと思う。他国人でも捕虜でもノルマを完遂する人には尊敬の眼でみていたようだ(さすが労働者の国)。結構ロシア語で悪口もいうようになって汚なく材木やトロツコの取合いもしたものだ。北滿より更に寒いシベリヤで食糧事情も悪い捕虜生活、五年間北滿の義勇軍生活が寒さに對

する抵抗力が捕虜生活のプラスを産んだ事だと思ふ。

夏の間に掘つた六、七十の穴が冬の間一杯になつた。二頭で引く箱馬車の中に瘦せこけた眞裸の死体が凍つて、ゆれる度にあつちにとん、こつちにとんと乾いた空気を響かせて箱の中から落ちて行く。看取る人もなくお経もなしの死体を何の感傷もなく眺めていたことも度々あつて、明日の我が身を暗示される如くでもあつた。裸の死体も冬なら穴の中に落すだけで土は被せられない。土が凍つてスコップが立たないからで、これがいつの間にか遠い地の果てから運んでくる砂嵐によつて埋葬されるのである。墓標もなし、正に無縁仏である。未だに行方知れないシベリヤ無名戦士の墓は数知れず存在する筈である。

いつか世界が平和になつて我が父、夫、兄弟を探し回つたところで墓標一つない場所を此処ですと決められても信ずることが出来るでしょうか。

こんな恰好で、こんな無責任な方法でシベリヤの土になることだけはご免、どうしても生きて帰りたい。どうか日本の神様仏様、私をお守り下さいと願わずにはいられなかつた。一日も早く祖国日本に帰りたい。

誰の想いも同じで、滅多に飛ばない飛行機が飛んでいると、モスクワからダモイ(帰国の)使令を運んで来たのではと空を見上げて淡い望みを託す日々もあつて、望郷の想いは日々高まつて行く。時々行われる演芸の演しものに妻子をしの人

で泣く年老いた兵士、童謡に涙を流す人、二度とあつてはならない悲惨な捕虜の姿があつた。

三年目を迎えんとする八月頃だつたらうか。突然政治部員から名指しの呼出しがあつて、しかも収容所長だとか。一瞬、身体に寒気が走つた。よくない噂のある政治部員で、すぐ営舎に入れる（罪を犯した人を入れる部屋）、内心不安を抱きながら部屋に入った。通訳なし二人だけの話。ニコニコ顔で迎えてくれる彼は気味悪かつた。お茶が出て椅子に腰かけるようゼスチャーをして、ソ連のボルシユビイキー（共産党だと思ふ）をどう思うかと尋ねたと思ふ。ロシア語は多少わかつてても答える言葉がわからない。「スターリン、オオケンハラシヨ（スターリン大変素晴らしい人）」。次に出た言葉は、彼は紙を見ながら「富山県東砺波郡南山田村に帰つたら共産党に入りますか」と言つた様に私は解釈した。ダ：ダ、カニシナ（確かに入党する事を約束します）。この不確かなロシア語を収容所長はどう理解したのか、彼の笑顔は満足気の様だと思つた。瞬間、頭をよぎつたのは日本に帰れるんじゃないか。だが最後まで帰れる話は少しもなかったが、かすかに春の足音だけが胸の奥に余韻を残していた。

いつも炭坑に行く駅に、三年前お世話になつた囚人列車が入つてゐる。誰の想いも一緒に若しかして帰れるんじゃないかと思つていた様子。噂は噂を呼んでこの話ばかり。その矢先に私の呼出しは引つかかる。話が合うと一人で決めていた。誰もが収容所長が私を呼出した事を知らなかつたようだが、知らない内に何処かに行つた私をどう思つていただらうか。遂にその日が。一生一代の賭に勝つた。

ソ連側より帰国と言う言葉がなかつたが、貨車の前で病気の兵士を転地療養の移動であつて、各一名元気な人が乗務して行く、それがお前だと事ここに到つても尚、ソ連側から帰国だと言う言葉は出なかつた。何処までも神秘で摩訶不思議な国である。でも冷静に考えて見ると、万が一何処かに移送もあり得る。そんな不安感も……。囚人列車は、まぎれもなく事実でやっぱり上下に仕切つた垂れ流しの樋もついた懐かしいやつ。ほとんど全部と言つていいほど重症患者で、炭坑で怪我をした人、栄養失調で瘦せこけて今にも倒れそうな人、この人等に今迄勉強した共産党史について講義せよ、毎日の講義内容を停車する前に報告することになつてゐた。自分の身体も充分に動かすことも出来ない病人ばかり。日本に送還されるであろう微かな望みだけで元気を装つてゐるが、どんな事を教えたらいのか見当もつかん、困つた。でも私は、これだけはしっかり守つてもらふ事を約束した。ハバロフスク発行の共産党の日本新聞によると、帰れると言う事で反ソ

宣伝や容共分子をつるし上げにしたり、スターリンの馬鹿野郎と怒鳴って再び別の収容所に送り帰される事を読んで知っていましたので、絶対反ソ行動を起こさない事、らしき言動を慎むよう再三にわたって注意した。

しかし、こうした私の発言も聞きように依っては猫かむりで、逆に密告されたらと心の中では覚悟が必要だったが、七十数名一人の落伍者もなく興安丸の棧橋を渡ってくれた。

戦争で生き残った興安丸、横腹に大きな日の丸、長い棧橋に白衣の看護婦さんが、一人の手を握りごころうさんでしたと温かい手のぬくもりと何年振りで見える日本婦人、生き残って帰れるこの感動と感傷。誰の目にもそう映っていただろう。人も私も声なく涙が頬を濡らす。

船の長い汽笛で岸壁を離れる。

離れるナホトカより船の進路に兵隊が群がり、今この海の遙か向うに懐かしい祖国日本があるのだ。

捕虜の身で生きて帰れるなんて夢の又夢でしかなかった。

出航して三十分位か、感動も未だ静まらないのに何事かマイクで私の名前を呼んでいる。まさか、確かに私、どうしたん、どうして！半信半疑で事務所に降りて行く。アメリカの

二世らしき兵士が、カラカンダ第六収容所の行動についての質問である。先に帰国した誰かが私の名前を告げたからだろうが、ソ連側を騙すには此の方法（共産党の学習をする積極分子）が一番いいと思ったのでと、しっかり説明するも手応えなし

（ところが富山に帰ってからGICからの呼出しがあつて、県庁に出頭した。カラカンダに於ける活動の内容、グループメンバーの名前、今後の日本での活動をするのかどうか、通訳を入れての矢継早の質問である。調査の結果、嘘がバレたら沖繩二十年の労働だと脅す）。

結局、駅に待ち伏せて尾行が三年も続いた様です。



突然、終戦で田舎に帰って来ても狭い田圃を這い回るだけ、いずれは仕事を捜して出て行く身、そんな私の日頃の仕事振りを見ていた兄貴から、これからの時代は自動車産業が発達する筈、免許証を持つておればおそろく食いはぐれはないと思う、と富山県自動車学校入校の手続きから、通学の費用まで負担してくれて、兄貴の将来の動向に目を向けた炯眼には今でも敬服している。

免許証のお蔭で最終的には、大阪市交通局市バス運転手に採用され在職二十六年九ヶ月、無事定年を迎える事が出来たのも、兄貴あつての事だと思っている。

田舎では小さい田圃の仕事以外にはなく、時々自動車の助手の仕事を手伝っていた。

冬は雪深く半年位は遊んで暮らす毎日。そのアルバイト方式で仕事をしていた会社が、東京―大阪北陸方面の定期路線に参画する計画が持ち上がり、早速大阪市中央区農人橋に土地を購入し仕事を始める事になり、その責任者に指名が私に出た。運送経験もない兵隊帰りの私に大都会で働けとはなんて事。運転手も助手も結婚して農家の大切な人ばかり。独身で何の心配もない私だから指名、考えてもどうなる訳じやないし、しぶしぶ引受ける事に。これがまた大変で、当時の状況は殺人的で労働条件なんてあつてなしで、朝八時半から明朝三時から四時頃まで働くのが当り前、正に奴隷労働だつたと思う。

然も私は当時、大阪労働組合支部長で、労働条件の改善を要望する立場とは逆に仲間を追い回す事が幾度もあり、今も時々思い出すと胸が痛みます。

さて、此の職場を逃げ出す方法は、秘かに市バスの試験に合格する事。見事に合格し退社する日の心苦しい事。田舎から連れて来た連中、沢山のお客と交流し実績を上げていた私が抜けだすなんて、支店長以下誰もが予想していなかったと思う。身を切る思いで市バスに入り、給料が半分以下でも仕事は時間きっちり、暇をもて余す程あつて、お金が欲しい運転手にはいくらでも残業が出来る、私には持つてこいの職場でした。

シベリヤ帰りと言う事で交流もあり、遂にシベリヤ強制留協議会に七年間も参加し、遂には中国残留日本人孤児探しの日中友好手をつなぐ会大阪支部の事務局長に担がれ、十三年間も奉任し、五十九年には中国黒龍江省まで頼まれて孤児探しをしたり、五十四年にはサイパン島遺骨収集団に参加し十日間で六百五十柱近くの遺骨を収集した。

後編

★サイパン島遺骨収集

義勇隊に入った時は、上は十八歳から下は十五歳。昭和十六年に大東亜戦争となり、昭和十七年頃までは中国戦線も南方方面も到る所で勝利、戦線も広大な島々を手中にした。ところが、アメリカ本土そのものが無傷のまままで次から次と新たな兵士、武器が補給される。対する日本にはそんな余力は何処にもない、送り出す兵士、食糧、武器はアメリカの潜水艦に片っ端から撃沈され、食べる物もない島で栄養失調、病に倒れる者数知れず、玉碎。

戦局の悪化と共に、満人の動きも日毎に冷たく感じられ、召集で送り出す私達は、彼等はどう見ていたか、老人、子供、婦人だけの部落を見れば、あの終戦の動乱、満人の暴動は彼等にしたら侵略者に対する当然の結果だと思う。

終戦のどさくさを嫌見せつけられ、結果はサイパンの遺骨収集と中国残留孤児捜しの仕事を続けられる事が出来た事は、二度とこんな事態が起らない事を願うと共に、此れからの人達の警鐘になればと願うばかりである。

次々と召集される兵士のほとんどが南方方面と決められていた様で、生きて帰って来た喜びをせめて一人でもいい、遺骨収集してあげたいと願っていた。日頃から聞いていた、私の女房から今日の新聞に「サイパン島の遺骨収集の旅」の募

集が出ているから申し込んであげようか。願ってもない機会を女房殿の好意にぶらさがり、然も偶然にも結婚二十五周年の銀婚式に当る年でもある。終生、忘れ得ぬ想い出として心の中に残るであろう。結婚二十五周年記念に遺骨収集なんてやるか、との懸念は一つもなかった。本土を狙った台風二十号も逸れ、ぬける様に澄んだ秋晴れ空が私達の旅立ちを祝ってくれている。

私も女房も初めての海外旅行であり飛行機の旅も初めてである。万が一のことも考え、秘かに家の中に遺書を残す。さて、大阪から成田までは快適な旅で成田で一泊である。主催の読売新聞大阪本社からは、現在もテレビで活躍中の大谷昭宏記者を含む総員四十三名の慰霊団である。案内役は過去十年間、すでに四十三回もサイパン島の遺骨収集を続けておられる東京天照山印相寺久保朝照代夫婦である。

眞赤な南洋櫻が咲き、舗装のない道路をバンパーもないポロポロの日本製トラックが走り回り、ほこりがもうもうと立つ日中の温度は三十三度を超えるとか。今や新婚旅行のメッカとなり其処此処にカップルが群れる。グアム島に次ぐ新婚旅行の穴場となっているそうだ。そんな楽しい連中と裏腹に骨を拾い集める仕事なんて、若い連中にとって三十六年前に起った悲劇の島の想像さえつかない歴史の流れ。軍人の魂とされる大砲にまたがり写真を撮り合う姿も其処此処に見受けられ、戦禍を隠す為に蒔いたタガン・タガンが生い茂り、

握りこぶし位のずんでん虫が木一杯に群がり脱衣した殻がザクザクと足がしずむ位に積っている。

一日目は近くの山に登り、遺族と一緒に自決した場所らしき所で細かい骨を拾う。元気な男連中は深いジャングルの中に分けて入った。洞窟の中や入口には錆びついた手榴弾がころがり、自決したのか黒い硝煙の跡が天井に届く程くつきり残っており、スコップで上の土を除くと水筒や飯盒の蓋が出てくる事を想像すると、死骸の上に土をかけ、別の人達が生活していた様子がうかがえる。水筒には必ずと言っていい程穴があいていて、水を飲ませないアメリカ兵の配慮だと思う。

次の日は、厚生省は誰でも行ける場所のみ遺骨収集されていたらしく、是非新しい場所をとの願いでロープを木に結んで崖の中腹に挑んだ。六、七十メートル下には大きな波が寄せては返す、生命懸けの収集である。海上から砲撃を受けたらしく、入口が岩で埋まっているのを交代しのぞきながら中に入る。食べる物が無いから出ようとして入口らしき処に遺骨遺品が散らばる。一斉に合掌をと。袋に詰める人、足の骨だけをひもでくくる人、優に三、四十人位はいた筈との声。頭蓋骨を撫でながら貴方のお名前は、涙を流しながら話しかける遺族の方もあって、胸がつまる思いを残した。又明日もと誓いを新たにしたり事が幾度か。

四泊五日の収集で六百五十柱近くが集められ、戦場で死者を弔う例に習い、木を切り櫓を組んで其の上に遺骨を並べ茶毘

に付す。

昭和五十四年十月二十日正午点火、ヒューヒューと鳴く遺骨。煙は高く日本の空に、残された手紙を焼く人、海行かばの合唱に涙を流し泣き伏す人。大きな骨は白木の箱で千鳥ヶ淵へ、細かい骨はダンボールに入れ海に流す。最終の日は、司令官の自決した部屋、アメリカ兵に追いつめられ、子供達を先に投げ自分も身を投げたバンザイクリフ。五、六百の死体が浮いたと言う場所で静かに般若心経を上げ引き揚げた訳ですが、折角の此の機会にもう一度収集がしたいと言う希望者も多く、大谷記者とも相談したところ、大谷さんは以前から遺骨収集をしている東京の印相寺の坊さんが気になるとの事、右翼の行動で生涯かけて遺骨収集する根拠はなんだろうか？はたしてあの費用は何処から捻出しているのだろうか。行為は立派であるが、どうもひっかかると言うのが大谷記者の言葉であった。案の定、後日此の印相寺が成田税関でピストル密輸が発覚されたとの報道にびっくり。右翼が遺骨収集に見せかけサイパンからピストル密輸をしていた。さすが大谷記者は長く警察の事件記者としての経歴が、疑いを把握していたとは驚きでした。そんなん、こんなんで折角の二回目の遺骨収集は終了。追いうちをかける様にサイパン政府から、昭和五十六年をもって遺骨収集を終了するとの報道があったとか。

数多く残りし遺骨に手を合せ

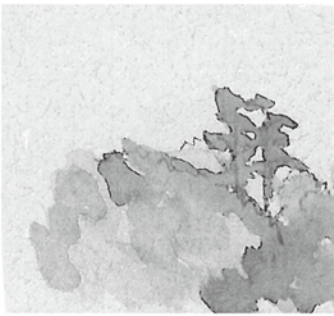
鎮めてやまずサイパンの島



『拘留者らを追悼する十字架(カザフスタン・カラガンダ)の墓標』

鎮魂の祈りをこめてますらおの

砕けし島の収骨終る



★中国残留日本人孤児捜し

こうして感動的な仕事が終わって又、又、どうしても傍観している訳にはいかない問題が起る。

昭和五十六年に入って、読売新聞に出ていた記事である。終戦から今日まで一貫して政府は、満州には現在まで残留日本人孤児はいないと再三報道していた。ところが、かつて開拓団の小学校の先生をしていらつしやつた長野県長岳寺の大僧正山本慈昭氏（日中友好手をつなぐ会会長）が、熱心に中国政府と交渉し、残留孤児の調査をして欲しいとお願いされていたそうです。僧正自身も二人の娘さんを現地に残しておられた事もあって、又満州からも僧正に日本の親を捜して欲しいと手紙を何百通も受け取っておられ、此の証拠が日本政府の重い腰を動かした。既に昭和四十八年、日中平和条約も締結していたので、満州から直接日本の親捜しに集団で来る様になり、又ある程度日本人の名前や証拠の品があつて、早々に解決出来た事もあって、当時は珍しさもあり不幸な歴史犠牲者と言う事で募金も多く、満州の現地在住の方も沢山帰っていらつしやつて、解決が早かつた方が多かつたです。こんなことに首をつつこんだのも当時、終戦時に困難を毎日見ていた私として、ついつい深くかかわる事になってしまつた。最初はお手伝いのつもりが、大阪にも日中友好手をつなぐ大阪支部を作り、事務局長の神輿に乗せられ、十三年間（平和条約が出来て急に満州からの問い合わせや日本国内からの

子供捜しの依頼も多くなり、人手が必要との事で昭和五十年頃から定年すぎまで、訪日した孤児達には歓迎会で日本の着物姿で写真を撮り、翌日は京都の場合は二条城から嵐山周辺を見学し、大阪は大阪城の見学で一日をすごす。

昭和五十六年三月二日に第一回中国残留日本人孤児四十七人を迎えてから八回く九回目となると、如何せん判明率も目に見えて下降し、対象者の高齢化と共に孤児も年をとり、判明したとしても肉親が身元引受人を拒否する。

孤児の父と慕われていた会長山本僧正すら孤児の永住帰国を止めようとまでおつしやるようになった。

折角肉親が見つかつて、田舎に帰つても言葉が通じない、生活が悪い、友達がいないと、勝手に黙って都会の友達のところに行ってしまう。頼み込んだ就職先も無断で別の会社に行く。僧正も長野県に帰国者の宿泊施設を作り、県や町から補助金を受け、生活。就職の場所を提供したのにいつの間にかトンズラ。

温厚な僧正も孤児に対する不信感から、永住帰国は奨励出来ないとなつたようだ。が、その僧正さんにも終戦時に開拓地に残された二人の娘を探し出して連れて帰る為にも、仕事を辞める訳にはいかなかったと思う。一度中国に孤児の実態と自分の娘を探しに訪中しようとなつた。

昭和五十七年八月、四十名からなる日中友好訪中と中国残留日本人孤児探しの実態調査である。

広い満州全域を探す訳にもいかず、取敢えず僧正の入植した開拓団と集団自決した佐渡開拓団との事。日中友好条約が締結されたかと言うも未知の国中国、感情的支配が色濃く残る中国の事、決して勝手な行動は慎む様注意を受け出発。

先ず北京に飛び天安門広場を見学。後宮も見学。更に万里の長城へと足を運ぶ。何年前か、人工衛星が写す写真には、万里の長城しか入らなかつたと言う程、大きくて長い六千キロメートルか七千キロメートルもあるとか。何メートルもある土壁を石と土で固められた土壁は、長い歴史と何十万人もの犠牲の上に築かれた壁である。再び此の地を踏む機会もないと思ひ、心ゆくまで楽しんで来た。

孤児探しの重大使命も暫し忘れて次の目的地ハルピンへ。飛行場には出発準備OKのロシア製の飛行機。機体の色も褪せ、エンジンの振動にカバーががたがたと今にも外れそう。通訳いわく、昨日まで無事に飛んでいた飛行機だと言う。勿論落ちていたら此処にはいない筈。肝を十分に冷しながら四十分でハルピンに到着。

観光バスは、此の間まで日本で働いた様にバス料金、入口、出口と書いた日本製。二時間かけて牡丹江省の目的地、七台蒲（チタイホ）に着く。夕方、歓迎会が開かれるとかで、其

の間、開拓団跡地の見学である。ローソク、線香は立てない、以前建てられた慰霊碑もお参りは駄目、土の持ち帰りも勿論許されない、駄目駄目駄目は、未だに地域住民の感情のこだわりか。侵略した国の人間を受け入れて頂いただけでも、心の中ではありがたいと誰しもが思った事だと思う。

通訳の話では、今でも崑の中から骨が出てくるので此処では耕す人はいないとか。又、当時一番先に警察、憲兵隊、兵士等が縄でつながり何処かへ連れて行かれたとか。

お国の為とは言ひ、他国を侵略する事の愚かさ、もっと醜いのは、同胞を守るべき関東軍が一番先に橋や鉄橋を爆破し、開拓民を置きざりにした事。

現実を目の前にして誰も黙して語らず、答える言葉も見当たらず辛い日中友好の旅でした。

又、歓迎会の会場では、夕方六時の開演の直前に入って来た一人の孤児。

山本先生に逢わせて下さいと、通訳の話では、終戦の時、私の持っていた鞆に山本と書いてあったから、先生は私のお父さんです。父さんですと言ってくれなかったら此の場で自殺しますと袋の中から白い粉を取り出す。

私達日本から来た人は、外で準備が出来る迄待っているのになかなか入れない。その内、中では大変な事が起きていた。

私達がどう見ても親子とは感じられないが本人は必死。

結局、中国当局も中に入って、本人と名指しされた先生（僧正）との間で、どんな方法で解決されたかは知る由もなかったが、

二年後、僧正の娘さん二人が見つかり、帰国されたのを見てびっくり。

正に親子とはこの事、瓜二つ。

勢こんでの孤児探しも中途半端のまま、

残した子供も年を取り、

親も自分の生活に一生懸命の様子。

誰の責任ですか聞きたい。

重たい、重い教訓を今も残したまま

終戦から七十年余、一人、二人と戦友も此の世から去っていきま

昭和十五年三月二十三日

八月二十三日

同二十年六月二十三日

同二十九年九月二十三日

同二十七年九月二十三日

同二十年九月二十三日

同二十九年二月七日

尋常高等小学校卒業、
満洲開拓青少年義勇軍に応募、
茨城県黒龍郷所入所

対店訓練所入所

満洲九才令状奏
召集令状奏
連軍進駐
連軍強行
八月十五日終戦

ソ連軍による強行
ソ連軍による強行
ソ連軍による強行
ソ連軍による強行

富山県に就職
富山県に就職
富山県に就職
富山県に就職

同二十九年二月七日
同二十九年二月七日
同二十九年二月七日
同二十九年二月七日

近所から誕生日を以て完全離職を決意

◎就職中の主な活動内容（七年）

シベリヤ強抑留協議会（七年）
シベリヤ強抑留協議会（七年）
シベリヤ強抑留協議会（七年）
シベリヤ強抑留協議会（七年）

中日友好の手をやすらぎ音楽祭詞家詩川しぐれ先生の
障がい者の、やすらぎ音楽祭詞家詩川しぐれ先生の
障がい者の、やすらぎ音楽祭詞家詩川しぐれ先生の
障がい者の、やすらぎ音楽祭詞家詩川しぐれ先生の

昭和五十四年サイパン島遺骨収集（十日間）
昭和五十四年サイパン島遺骨収集（十日間）
昭和五十四年サイパン島遺骨収集（十日間）
昭和五十四年サイパン島遺骨収集（十日間）

（長い期間いろいろなことに関わってきた自分に対して）
（長い期間いろいろなことに関わってきた自分に対して）
（長い期間いろいろなことに関わってきた自分に対して）
（長い期間いろいろなことに関わってきた自分に対して）

玉音の日も鳴いていた油蟬

嶋澤 喜八郎(私市)

今でも鮮明に思い出す場面があります。それは今から七十年前、私が八歳の時の夏休みのある日のことです。

綿を丸めてぼろきれに包んだボールで、空き地で三角ベース遊びをして帰宅した時のことでした。

大阪から疎開してきた叔父のラジオが「日本は戦争に負けた」と天皇陛下の声を報じたとして大騒ぎをしていました。何の事かよく分からない私でしたが、そのあわてぶりから、事の重大さは直感致しました。

私の故郷は山陰鳥取で、今は寂しさがどっと押し寄せて来ている浜村温泉の近くの農村で、第二次世界大戦の直接の惨禍からは少し距離をおいていました。戦争中にたった一度B29の機影を見たくらいでした。それでも、小学校の校庭は諸畑と化し、運動会はできず、スイカは贅沢品として栽培は禁じられていました。

あの日から丸七十年が経ち、生活も人の心も一変したいま、何やら当時とよく似た匂いがたちこめているのを感じています。再び過ちを犯さぬために最も信頼できる教師は「歴史」

だと言われているますが、世間はそれを忘れ、流行りに流され、ポケモンGOに熱中している有り様に、底知れぬ不安感を感じるのは私だけなのでしようか。あきれるというより腹だたしさを覚えてしまします。

「戦争は人の心の中に起こるもの・・・」という言葉をかみしめたいものです。戦争はゲームではなく「人が人を殺しあうもの」でそこには思いやりや正義などはみあたりません。今各地で起こっているテロ行為は、まさに戦争そのものであり、今一度原点にかえって問い直し、解決の道を探らねばなりません。

人間の心や命を大切にす精神でもって取り組みを前に進めたいと思っています。たとえそれが微々たるものであっても。

いま、外でうるさいほど蟬が鳴いています。

(二〇一六・七・二五)



命

谷村 千枝(郡津)

私は、大正九年生まれの九六歳です。交野市郡津に生まれ、結婚する二七歳まで郡津で育ちました。

家族は、両親・姉・弟二人の六人家族でした。姉は二一歳で結婚し、九〇歳で亡くなりました。二つ下の弟は海軍士官学校へ行き、軍人となって潜水艦で北満の青島へ上陸、二年後に帰国し、広島に居りました。下の弟は陸軍士官学校へ行き、昭和二〇年終戦になる前に卒業しました。

男性はいわゆる赤紙という召集令状が来ましたが、私には女性ということ、二三歳の時ピンクの令状がきました。小学校の修身場(今の運動場)に〇日に集合しなさいという通知でした。集められた中から、召集されても家庭に大きな影響のないもの三〇人が、枚方の砲兵工廠に配属されました。仕事というのは、兵隊さんの布団の綿が千切れているのを糸で綴りながら、補修することでした。毎日郡津から中宮まで電車に乗って通いました。駅からの坂道を歩き、一列に並んで門のところ、チェックがあり、「頭(かしら)、中」という声で中に入ることができ、帰りには「ご苦労さん」と声掛けがありました。毎日、おにぎりを持参していきました。

暑い時に布団の綿を糸で綴っていく作業は、地獄のようでした。布団の中にはノミがたくさんいて、家族には「またノミを持ち帰ってきたね、かゆい、かゆい」と言われました。一年ほど勤めてから、叔父の会社を手伝うように言われて、友達と三人でいきました。仕事は、金庫番で、空襲警報が鳴ると、現金を小さな金庫に入れてそれを防空壕に持って入るようにいわれていました。その会社で終戦まで働いていました。

防空壕を各家で掘るように言われましたが、父が高齢のため掘ることができず、隣の人が大きな防空壕を掘ったので、私の家族も入るように言っていました。毎日のように交野村役場から大きな音で空襲警報が鳴りました。

昭和一八年ごろ、その日は、空襲警報も鳴らず、両親も出かけ、私一人が家におりました。洗濯物を干しに外の物干し場にいきました時、アメリカの戦闘機が一機私目がけて、急降下してきたので、あわてて家の中に飛び込みました。一瞬の差で、パンパンと二発発射してきました。あの時ほど怖かったことはありません。今でも頭から離れません。二〇分ほどして叔父が駆けつけてくれました。叔父が屋根を見に行ってくれますと、蔵の瓦が割れて、一〇センチほどの不発弾が二発突き刺さっていたそうです。あとで叔父が見せてくれました。

八月六日、広島に原爆が投下されたニュースを聞きました。広島にいる弟の安否が気遣われましたが、何も情報がなく家族みんなが心配していました。叔父がもう葬式をだそうと言ってきましたが、「弟の安否がわからないままお葬式をだすのは嫌だ、広島まで確かめに行きたい」、と言いましたら、叔父がなんとか広島までの往復切符を手配してくれました。原爆投下から二週間後、父と二人で夜行列車に乗って行きました。真っ暗闇の車両で何も見えず、手探りの中で掴んだのは、馬の足でした。馬を運ぶ貨車だったので。夜明け前に広島の一つ手前の駅で降ろされました。そこから先は線路がなくなっていました。広島駅まで暑い中、歩きました。広島駅の駅舎は跡形もなく、ホームのベンチだけがひしゃげた形でありました。駅を出たところで最初に見たのは馬の死体でした。五分ほど歩くとトタン板の上で死体を焼いています。至る所でトタン板が真っ黒になっているのを見ました。白い山のようなものがあって、近づくると焼いた人のお骨が、山のごとく積んであり、縄を張って半紙が挟んであって、亡くなった人の名前が書いてあり、身内の人は骨を持って帰るようにとありました。

弟がいた兵舎の場所もわからず、行き交う人々は、水を求めて川の方へ移動していて、尋ねることすらできませんでした。一人の水兵服の人を見つけ、弟の名前を尋ねると、「生きておられます、兵舎で機密書類を集め、残務整理をしてお

られます」との返事、兵舎で弟の無事な姿を確認でき、父と大喜びしました。持ってきたお握りを食べるようにと言いましたが、「僕はいいから、この兵舎で働いていた娘さんが怪我をしていて、両親の安否を確かめに自宅へどうしても帰りたいというので、連れて行って欲しい」と頼まれました。兵舎にあった車でその娘さんを自宅まで送り届けましたが、あたり一面は焼け野原、けれども娘さんは「生きておればぜったい両親はここに来るはずだから」と、どこでも動かない、仕方がないので持ってきたお握りをあげて、草むらに寝かせました。おそらく誰も来なかったら自分も死ぬつもりだったのだろうと思います。

その後、広島線に乗ったとき、娘さんたちの会話で「あと何日なの？」「私三〇日って言われたの」「私は三五日から四〇日ぐらいって言われたわ」なんのことだろうと不思議に思っていましたら、よく見るとつり革を握っている娘さんたちの腕の内側の傷口一〇センチに、ウジ虫が群がっていて、自分たちの寿命の話をしていることに気がつきました。

こんな悲惨な状況の中で、思い出しても笑えることは、父と大阪に戻るつもりで乗った列車が、下関行だったことです。窓から見る景色がどうも往きと違うのに気が付いて、慌てて車掌さんに言って、すぐに反対側の列車に乗りました。大阪行の列車は、引き揚げの兵隊さんで大混雑、屋根の上まで人が乗っている鈴なり状態でした。小用を足すのに窓から出る

ため、お尻を押ししてもらい、草むらで用を足し、又窓から入られてもらうのに引っ張り上げてもらったりしました。広島駅から、又二駅歩いて、大変な思いで大阪まで帰ってきました。

弟は、その後一年広島から帰れませんでした。

帰宅した弟の話では、八月六日の朝、呉に来るようにとの指令で、将校三人で一〇時に駅に集まる約束をしていたそうです。が、その朝から空襲警報が鳴りっぱなしで、大きな音に飛び起きて、兵舎まで走っていき、二階の階段の所まで来たら、死体が累々と重なり合っているのを見て、しばらくは呆然と立ち尽くして・・・やっと『生き残った自分たちで出来る限りのことをしなければ』と決心したそうです。元帥の宮殿下も亡くなっておられ、二三歳の中尉の弟が全責任を負って、まずは秘密書類を焼く・亡くなった友の家へ知らせる・生きていても歩けないものとお互いに励ましあって、夜昼なく働いたそうです。

父と私が弟に会った時は、父も私も本人が怪我をしているとは、知りませんでした。帰宅後、母が毎日毎日ガーゼで手当てをしている様子を見ていたぐらいです。原爆投下の時でしようね、そばにあつたチタンの箱が割れ、その破片が横腹に刺さったそうです。そのころには原爆の被害について周知されましたが、横腹が化膿していた弟に、叔父が「絶対部屋から出るな!」ときつく言っていました。父と私は、幸いなことに広島に一日いましたが、その間水も飲まず、お握りも

食べなくて、大阪にトンボ帰りしたのがよかったのか?被爆しておりませんでした。

弟は、治療には長くかかりましたが、一度も病院へ行かず、母の愛情だけで傷口も塞がり、元気になりました。京都の会社に入社が決まり、休日は大好きなゴルフを楽しみ幸せそうでした。お陰様で六九歳まで長生きさせていただきましたがこれも偏に、御神・御仏様のご加護と感謝しております。

今思いますが、日本の建物はほとんど耐震性になつていて、大家族で住むことができます。『親の姿を見てこどもは育つし、ご近所づきあいも大事にして、困ったときに助け合う。』こういう日本の良いところを残していつて欲しいと念じて居ります。



編集後記

谷村千枝さんは、現在九十六歳で、お一人暮らし。郡津で女性では最高齢者の方のようです。

『我が人生に悔いなし』とおっしゃられ、その想いから、戦争体験集の聞き取りに応募してくださったとか。

「昔はみんなが貧しかったから、まず、生き抜くことが第一条件で、いざという時には、みんなが助け合いました。今から思えば、それが宝だったと思います。」とおっしゃいました。

お子様たちやお孫さんたちも時々訪れられるそうです。立ち寄られたときには、昔話をされると、

お孫さんたちは「おばあちゃま、いい勉強させてもらって有難うございます」と言われて、帰られるそうです。

お元気で、ご自分のその元気であることに、感謝されながら生きておられる姿に、感服いたしました。 住井 記

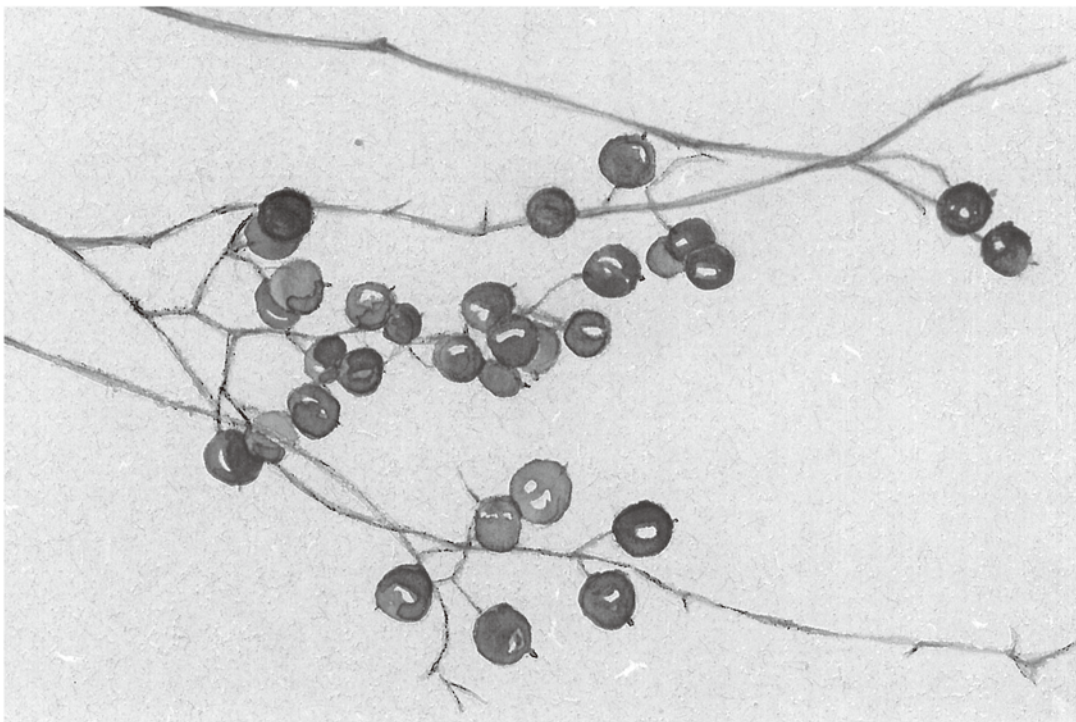
『聞き取り』

日時 平成二十八年七月二十一日、九月二日

場所 谷村さんのご自宅にて

出席者 住井・仲谷

『編集』 仲谷



孫たちへの証言 引き揚げ

松本 静子(郡津)

戦前、中国東北丹東(とうへいたんとう)(満州国安東)の牡丹江(ぼたんこう)木材で、軍の要請を受け、木造船を昼夜兼行で造っていたところに終戦になり、周囲の日本人が奉天經由でコロ島から引き揚げていきました。

私たち(主人と八カ月の娘)と技術者の方に、中国人の會長は、「日本に帰っても仕事がないから、ここで働いて欲しい。」と言って帰してくれそうにありませんでした。そんな時、あちこちで暴動が起き、ある晩婦女子宅に暴漢が入り、婦人に強姦しているような泣き声でしたが、怖くて誰も出て助けることができませんでした。

十月に入り、中共軍と国府軍の戦争が激しくなり、中共軍が安東を放棄することになりました。

ある晩、突然あちこちの工場が中共軍の手によって爆破され、爆音は物凄く、窓から見ると、夜空が爆破による火災で、遠く近くが真っ赤に染められ、生き地獄でした。

丁度その時親しい朝鮮の友人が、「明日船が出るよ。」と知らせてくれたので、これが最後の機会だと、技術者の家族と

相談して漁船のある鴨緑江(おうりよくこう)へ行くと、大勢の人が並んでいました。高額のお金を払い、船に乗りました。安全のため女・子どもは狭い魚漕で向かい合わせに座り、私は娘を抱いていました。男子は甲板でした。同じような船三十隻位が鴨緑江を下って行きました。漁船は風のある時は帆で走り、風が止むと発動機を使っていました。河口から大海に出て一晩明けると船が動きません。船長が、「今までのお金ではこれまで。これ以上進めない。有り金全部出せ。」とのこと、私たちはしぶしぶ万年筆と父の形見の懐中時計を出しました。ようやく船が進みだしました。持ってきたお握りなどを少しずつ食べましたが、三日目には唯一のいり米を食べました。娘は乳の出ない乳首に吸い付いたまま泣き、オムツは海水で洗うので、お尻が赤くただれ、泣きどうしでした。便所といえ、船尾に囲いもなく板を二枚海に突き出して敷き、それをまたいで大小の用をたしました。恐ろしくて必死の思いでした。

幾日か過ぎた時、病弱で乗船した男性が力尽き亡くなりました。水葬にし、死体を投げ込んだ所を一回りして航進しました。暫く進むと、男の子が誤って船から落ちたので、復員兵が一人、上着を脱いで飛び込み、船上の男性と連繫プレーで二人共助け上げました。ホッとしたのもつかの間、船長が大声で「これから最も危険な箇所にはいるから、何かに掴まり、姿勢を低くして、船が揺れても決して動揺しないように。」

と言いました。潮の流れは急で、船は大きく左右に揺れ、まるで木の葉のようでした。私たちは、魚漕で、時々頭上から海水をかぶりながら、ただただ無事を祈るのみでした。

その日の夕方、北朝鮮のある所に着き下船しました。ソ連兵が来て「革製品と毛布を置くように。」と言われ、それに応えたら行先を教えてくださいました。もくもくと歩き続け山越えをしました。頂上で大勢の人と共に私たちも星を観ながら丸くなって仮眠しました。暫くして起こされ、又ひたすら黙々と歩きました。やっと米軍の駐屯地に到着。米軍の指示のもと、ある大きな倉庫に案内され、久しぶりに熟睡しました。米軍の支配下の安堵感から、井戸端で煤けた格好をしていた顔や服装を整えました。その夜、米軍が来て、通訳と話をし、「女性を出せ。」とのこと。男性たちは困っていました。私は、主人の後ろに隠れ小さくなっていました。その時、奈良で水商売をしていたという人たちが六人が名乗り出てくれましたので、その方たちにお礼のカンパをしました。お金も食料もなく困っていたら、誰かが朝鮮の農家に稲こきの手伝いの仕事があると言い、主人たちは一日中働いたので食事だけありつき、私も一緒に食べることができました。母乳も出るようになり、娘も元気になりました。

幾日か主人は馴れない仕事で体調をくずし、食べることができなくなっていた時に、米軍より命令が出て、有蓋車で仁川に行くことになりました。列車が止まる度に、列車から

男も女も飛び降り、列車のすぐ下で用を足しました。仁川から米軍の船に乗り、釜山に到着し、大きな倉庫で過ごすことになりました。朝夕一人コップ一杯の粟のおかゆでいつも空腹でした。大家族のところでは、食事の配分の時は、兄弟げんかが絶えませんでした。

五日目ごろ引き揚げ船興安丸で釜山から念願の博多に着きました。下船した時、頭や体にしらみがわいていたので、頭からDDTをかけられました。港の集会所で婦人会の心づくで、苦にもなりません。港の集会所で婦人会の心づくしの夕食は、みそ汁と焼いた鰯と白米で、何よりのご馳走でした。

翌朝、手続きを済ませ、義母の待つ神戸へと向かいました。途中原爆投下で焦土と化した広島駅のホームの屋根に、へんぺん草が二、三本生えているのを見て感動しました。

目的地の神戸垂水区に着いた時には、日もとつぷり暮れた昭和二十一年十二月六日でした。

平成二十八年松本静子さんは亡くなられました。享年八十七歳でした。

平成二十九年四月松本さんの娘さん湯川慈子(いつ子)さんから、松本さんが七十二歳の時に書かれた原稿をいただきました。

仲谷 紀子 記

戦前戦中戦後を生きて

門田 利康(藤が尾)

「僕は戦争に行つてへんから大した話は出来んよ」

この度の「平和の礎」五集の原稿集めで長老の方を探していたところ、藤が尾の民生委員さんから九十歳を超えても、尚かくしゃくとされている方がいらつしやると、ご紹介を頂きました。

「交野市藤が尾で九十歳を超えている者はもう僕一人位かも、何かお役に立てれば」と、聞き取りに協力して下さいました。

その時の第一声が、「僕は戦争には行つてへんから大した話は出来んよ」でした。

お生まれは大正です。お父さんの転勤に連れられて、各地に移られています。東京の谷戸尋常高等小学校(六年間)を卒業後、中学校(五年間)に進まれ、専門学校(三年間)を終えられ、就職されています。ご兄弟は姉、弟二人、妹の五人兄弟でした。終戦後に、結婚され、ご家族はお子様二人の四人家族です。交野市の藤が尾に住み着かれて四十年程になるとのことです。九十六歳になられた現在は、藤が尾でお一人暮らしをなさっています。私たちがお訪ねした折には、丁

度遠方にお住いの娘さんが一週間程前に訪ねて来られて、つい先日帰られたところだったようでした。

「娘が三、四泊して、帰ったところですよ、息子もちよくちよく、来ます」と、言われました。

「息子さんも娘さんも親孝行なさつてよろしいですね」との、聞き取りの仲谷さんの言葉に、笑つて嬉しそうに頷いておられました。

「火、土にはヘルパーさんが来てくれて、訪問看護師さんも来てくれる。月、水、金は配食サービスでお弁当が届くから」と、しつかり話してくださいました。

「僕は弾の打ち合いとか、難しいところに行つてないからね、二十歳前に赤紙を受け取り、軍隊に入隊、内地から教育を受けて、北満に五、六年、行かされていたがね、ただ戦争でソ連との向かい合わせでね。それから南に行く部隊に配属になり、大きな船、でっかい船を探すまで南に行けなくて、内地で仕事をしろと言われて、内地に帰つて来ました。それから、もうじき、もうじき、と云つてる間に、終戦になった。

終戦の一年前ごろ僕は南方に行きますと希望してね、そのまま二年位いたら、仲間はソ連に行つてるからね、あそこに行つたら大変だった。僕は話に聞くだけでね。

入隊した時は軍曹で、二、三か月で小尉、一年たつて中尉にしてくれた、運がよかつたのか、兵役の収集の時に短期現役の募集があつてね、試験受けてね、お陰で軍隊ではきつい

目やひどい目にあつたことはなくてね。

内地に帰つてからは東京の近くの軍隊で終戦までつとめました。

大阪空襲でおやじは大変だったが、幸い家は阿倍野でまわりは焼けてなく、家は大丈夫でした。兄弟は姉と弟二人に妹の五人兄弟でしたが、姉は二〇歳の専門学校の時病気で亡くなり、弟一人も学校入る前と中学の時に病気で亡くなつていきます。戦中のことで、おやじやおふくろは、薬もなく、苦勞していると思いますね。軍事工場に勤めていた妹は、終戦後、結婚していません。

僕はのんきだったからね、内地の東京の部隊では、食事、寢床は全部、主計さんがやってくれた。まあ、楽な方で、月給もらつて、あの頃で、役人さんの一番下っぱくらいのと同じ位はあつたと思います。南に行く船がなくて、船を探している中で、東京近郊の部隊で、終戦になつた。昭和二十年で終戦。予備役は帰れど。現役、予備役、後備役とあつて、現役は全部兵隊にやられて、予備役は足りない所に使われて、あのまま戦争が続いていたらどうなつていたか分からない。

玉音放送は並んで聞きました。こんで、いよいよ、終わつたかと、それで予備役は帰れと言われて、さつさと帰りました。残された人は大変だつたと思うけど。一日がかりで帰りました、昼出て、翌日の昼に、汽車は満員で、座れたが、買出しの人でいっぱい、奥さん達が荷物を一杯持つて、大変

だつたと思います。

大阪に帰ると、幸いにして、おやじの家はありました。やれやれと。帰ると両親にびつくりされました。みんな誰も帰つてなくて。三年位たつたら、みんな、ぞろぞろ、帰つて来ました。当番兵が家まで送つてくれてね。八月十五日に終戦で九月二日に家に帰つてます。三十歳過ぎてました。

帰つてから仕事はなく、両親が面倒みてくれて、就職し、結婚しました。結婚してからも、母と妻は食べ物で苦勞しているが、僕には分からない。女房は八つ違いで、あの頃、男が少なかつたから嫁さんに来てくれたと思います。女房は家が焼かれ近くに避難して来ていて、おふくろはよく知っていました。あの頃は恋愛なんて、考えられないし、彼女も出来ません。本当に男がいなかつたんです。

終戦の時、両親と四人暮らしです。僕はのんきで、幸運だつたと思います。今、若い人が軍隊に行つても、務まらんと思いますが。戦死された家族の方は大変だつたと思います。戦争はせん方がよいし、日本がつぶれるようなことになれば、若い人は、若い人で考えていくと思います。」

と、七月末の暑い中での聞き取りにも関わらず、淡々とお話しくださいました。

戦前、戦中、戦後、と大変な時代に生まれ育ち、過ごさざるをえなかつた人生の重みを、「僕はのんきで幸運でした。運が良かったと思います。」と、なにか、お人柄の温かみを

感じながら聞きとりを終わりました。

最後に

「僕は徴兵義務で軍隊に入り、希望したわけではありません。喜び勇んで入ったのではない。」

二〇歳で、いやおうなしに、徴兵検査です。テントで一人、将校三人に口頭試問を受けました。合格になり、病気で無い限り、みんな行かされました。それから下士官の学校で教育を受け、三か月で将校になり、北満に配属されました。下関から朝鮮半島に入り釜山から奉天、新京を通り、満州の北の端に、冬はマイナス二〇、三〇度です。ソ連軍が歌っている軍歌か、国歌かが、聞こえたりしました。日本人の農村もあり、日本人家族が住んでいました。現地で四、五年、その後、内地勤務になり、長野、東京で終戦を迎えました。終戦で家に帰る時、軍のことはあまり喋るなと言われ、今でも頭から離れません、聞き取りにも大した話は出来ません」と

(住井・記)

『聞き取り』

日時 平成二十八年七月二十七日(十三時)

場所 門田さんのご自宅にて

出席者 仲谷・住井



交野と満州開拓団の縁

私市植物園の前身は...

戦争直後の空からの「植物園」写真です



私市駅です

植物園入り口の「日の出橋」
黒いのは「天野川」

赤い円の中に小さな円の形をした
ものが見えます。これは、いつた
い何でしょう。
全部で10個あります。

1948/3/27 米軍撮影

日輪兵舎(にちりんへいしゃ)

小さな円のところには、このような建物が10棟建っていました。



茨城県内原町郷土史義勇軍資料館に復元された日輪兵舎

この建物は、2階建てです。2階は寝室、1階には食堂や訓練所がありました。

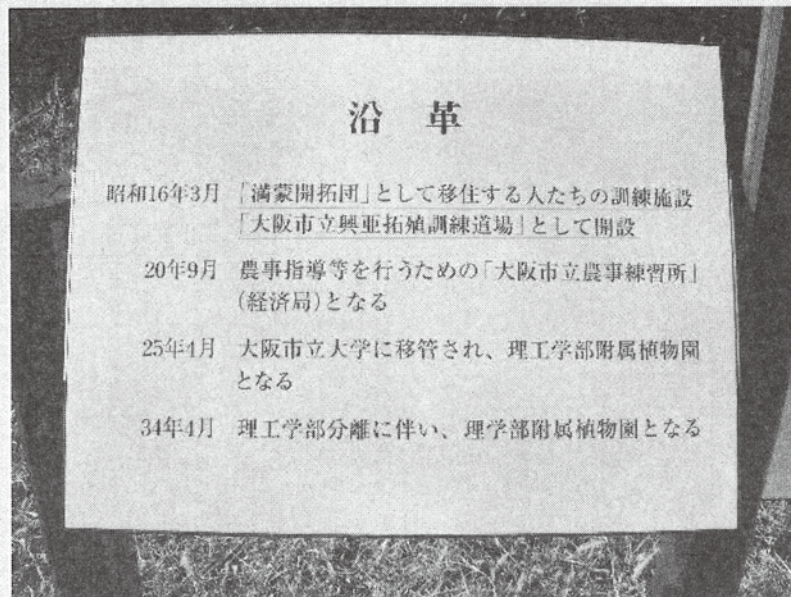
60人が、足を円の中心に向けて寝たそうです。

では、どうしてこのような円の形をしているのでしょうか。

この建物は、モンゴルの「包(パオ)」に似ています。



植物園入り口看板



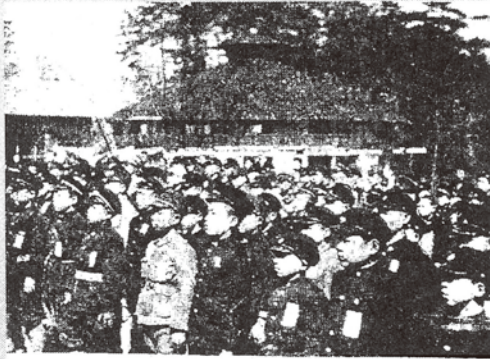
「興亜拓殖訓練道場」とは？

1931年 満州事変

1932年 「満州国」設立

以後、国策として国民を「旧満州」に送り出すために、各地に現地で農業生産し生活するための訓練施設が置かれた。

中国残留孤児の悲劇は、ここから始まっています。



小呼蘭義勇隊、私市興亜訓練道場への入所風景

満蒙少年義勇軍

さらに、国民学校卒業の14歳～15歳の子どもたちも「満蒙開拓青少年義勇軍」に組織し、ここで訓練を行い、「満州」に送り込んだ。これには、学校割当に従い、教師たちが家庭訪問し、親を説得して子どもを参加させる一翼を担わされた。

1994年以前の植物園案内板には・・・



この、2つの建物は、左が、大阪市立興亜拓殖訓練道場の講堂。

右が、事務所です。今老朽化のため、1994年3月にとりこわされました。

今は、残された石段の上が広場になっています。

こんな建物でした



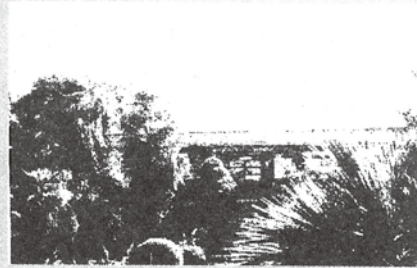
当時の講堂



今も講堂下の石段があります。



事務所下石段



事務所

小川一詩さん

この資料を作成したのは、交野市内小学校で先生をされていた小川一詩(おがわひとし)さんです。小川一詩さんは、交野市の小学校副読本づくりにもかかわっていました。交野の歴史をひもとくと、戦争の影響が随所に残っていることに、改めて気づかれたのでした。ですから、遠足や家族連れで植物園を訪れるみなさんに、次のようなメッセージを残されています。

今は家族や子どもたちが楽しく遊んでいる植物園内の広場で、かつて少年たちが家族から離れて、幻の夢を見させられながら、毎日きびしい訓練を受けていた。そんなことを考えながら、植物園を歩いてみてください。

小川一詩さんは、病のため在職中に亡くなりました。データは、勤務された小学校の先生もお持ちですが、交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会に委員を送っている、交野市教職員組合のホームページからご覧になれます。

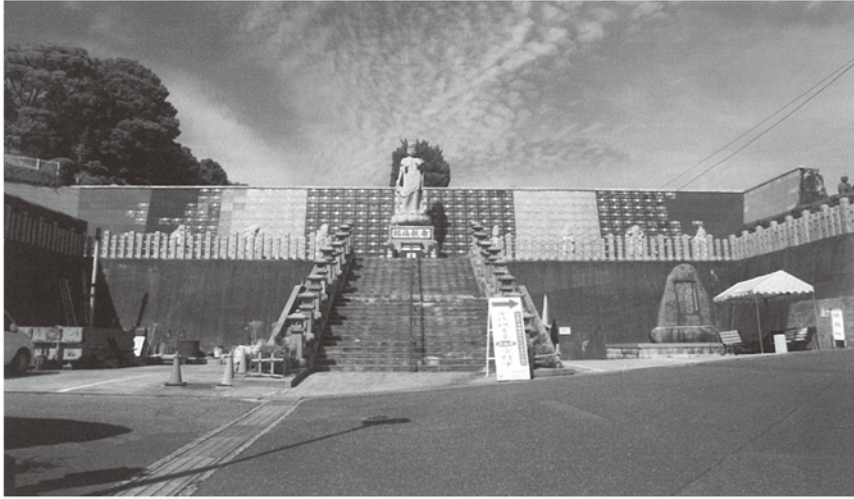
同ホームページ → 交野戦跡ウオーク

→ 私市興亜拓殖訓練道場

文責 草薙正己(大学・交野市教員を通じての友人)

次は、星岡

平和台霊園（星田）の観音像右下方にあるジャムス
 小学校の記念碑



佳木斯（ジャムス）小学校の記念碑には、
 黒竜江（アムール河）の支流である、松花江（スンガ
 リ川）に沿って、穏やかな暮らしがつづいていた佳木
 ス（ジャムス）も、
 昭和二十年八月九日の早暁に突如爆撃を受けたこと。
 男子教職員は徴用され、青少年達は学徒動員され、残
 された婦人幼児達が逃避行のやむなきにいたったこと
 が記されています。
 その惨事から三十有余年を経た昭和五十四年四月に、
 この記念碑が建立されたことが記されています。



なぜ佳木斯（ジャムス）小学校の記念碑が、交野市星田にある平和台公園に建立されたのでしょうか？

この記念碑が建立されたとき、東京在住の責任者の方が、「祈念碑は、あまの川を望む場所に建てたかったのです」と語っておられたそうです。松花江は現地ではスガリ川と呼ばれ、それは、空に流れる天の川を意味したそうです。改めて碑をみると、最初の一文に、「悠悠流るる松花江」と唱われていることとつながります。



笹飾りに代えて、コーリヤン (モロコシ)に飾りつけて七夕を



冬季の厳寒にくわえ乾燥の大地に竹や笹はありません。七夕は、「コーリヤン（高粱：もろこし）に飾りをつけました」と、天に願いを込めた満州での暮らしを聞かせていただきました。

ジャムス記念碑の項 起稿・文責 草薙 正己

交野の平和と戦争関連モニュメントから



平和の鐘 (いきいきランド前広場)



「平和と人権を守る都市宣言」碑 (いきいきランド前広場)

平和と人権を守る都市宣言

あなたの強い願いがあるから
きっと 核や戦争はなくせる

あなたの暖かい愛があるから
きっと 差別や虐待はなくせる

交野のこころは「和」
「平和と人権」はその命

かけがえのないものを
あなたと共に守り抜きたい

そして さらにその輪が
全地球に広がることを念じ
『非核・共生・非暴力都市 かたの』
をここに宣言します。

平成13年11月3日

交野市

City Declaration on Observance of “Peace and Human Rights”

With our strong will, we can eliminate nuclear weapons and wars.

With our love, we can eliminate discrimination and abuse.

The spirit of Katano is “WA” or “Peace.”

The desire for peace and the respect for human rights are at
the heart of Katano.

Together we stand and together we protect what is precious in life.

We wish that this circle of hope extends to and unites all people
throughout the world.

Based on our commitment to these principles, we hereby
declare Katano to be a
“Non-nuclear, abuse-free city with compassion for all humanity.”

November 3rd, 2001

City of Katano

Translation: Multilingual Center, FACIL (NPO)

あとがき

「平和の礎」第五集を発刊することができました。戦中、戦後の体験を語ってくださる方が少なくなり、原稿を頂くことも困難になってきています。決して忘れてはならないこの体験記をいかに伝承していくかが、私達の今後の課題です。ご協力いただきました皆様ありがとうございます。

編集者 平和継承事業部会

編集委員 市川義人

可児義明

草薙正己

住井麗子

玉井八恵子

仲谷紀子



「平和の礎」 いしずえ

—交野在住者の戦争体験集第五集—

平成二十九年八月発行

発行者

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

(市) 人権と暮らしの相談課

交野市天野が原町五丁目五番一号
電話〇七二—八一七—〇九九七

印刷 有限会社 栄光製本

電話 〇六—六九〇〇—一一六五